

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第12挿話(新訳と注解)-その四

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8845

ジェイムズ・ジョイス

『ユリシーズ』第一二挿話（新訳と注解）——その四

小川美彦

凡例

注解に「訳」とあるのは「訳者の注」の意味である。そしてそれは、

Weldon Thornton : Allusions in *Ulysses* (以下 AU と略す)

Don Gifford with Robert J. Seidman : Notes for Joyce. An Annotation of James Joyce's *Ulysses*. (以下 NJ と略す)

の注釈書の注の訂正および一部加筆、もしくは新しく書き加えた注解であることを示す。

注解の割注に例えば一―六五の注解参照とあるのは、第一二挿話―その一、の参考にすべきページ数を表わしている。

略字として CM = *Chamber Music* Du = *Dubliners* U = *Ulysses* FW = *Finnegans Wake* Ir = Ireland D = Dublin
B = Bloom M = Molly を用いた。

聖書よりの引用は原則として Douay Version の章節に於て、Authorized Version の言及は「欽定訳」と明示した。
アイルランドの人名、地名の発音については、一部の古名を除きすでに英語化したものは英語読みにした。

三 四 頁 の 四 割 な 名 詞 (the prudent member) キリスト教には、キリシマ哲学、*πλάτων* (i.e. Plato) (429?—347 B.C.) や *Ἀριστοτέλης* (i.e. Aristotle) (384—22 B. C.) の倫理観に基づいて、スコラ哲学で完成された、すべての徳を統一的に基礎づける四つの基本的な徳、すなわち枢要徳 (virtutes cardinales) とどう考えがめる。そのひとつが賢慮 (prudentia) で、それはそれら四つの徳——他の三つは正義 (iustitia)、節制 (temperantia)、剛毅 (fortitudo) —— の中から、重要なすべての道徳的行為の規範とされるものである。

この四つの枢要徳の分類と名称は、すべてプラトンの *Πολιτεία* (*Respublica* or *Republic*) III 472 E に現われている。*σοφία* (= *prudence*)、*δικαιοσύνη* (= *justice*)、*σωφροσύνη* (= *temperance*)、*ἀνδρεία* (= *courage*) の四徳は、

だが、それらの徳目を明確に定義つけて、キリスト教の神学体系の中に位置づけたのは、もちろんスコラ哲学の完成者 St. Thomas Aquinas (1225?—74) である。彼は『神学大全』 (*Summa Theologica*) I a 2 a 61 で枢要徳について論じた。その中で、後述すべき各徳について賢慮を探り上げ、その定義づけを——

... cum prudentia sit in ratione, ... diversificatur quidem ab aliis virtutibus intellectualibus secundum materiam diversitatem obsectorum ; nam sapientia, scientia et intellectus sunt circa necessaria ; ars autem et prudentia circa contingentia ; sed ars circa factibilia, quæ scilicet in exteriori materia constituuntur, sicut domus, cultellus et huiusmodi ; prudentia autem est circa agibilia quæ scilicet in ipso operante consistunt ... (... since prudence is in the reason, ... it is differentiated from the other intellectual virtues by a material difference of objects. Wisdom, knowledge and understanding are about necessary things [i. e. 「必然的事物」], whereas art and prudence

are about contingent things [i. e. 「偶然的事物」], art being concerned with things made, that is, with things produced in external matter, such as a house, a knife and so forth; and prudence, being concerned with things done, that is, with things that have their being in the doer himself . . .)

(2a2æ47,5)

. . . qualiter et per quae homo in operando attingat medium rationis, pertinet ad rationem prudentiae. (. . . it belongs to the ruling of prudence to decide in what manner and by what means man shall obtain the mean of reason in his deeds.)

(2a2æ47,7)

またキリスト教では自然徳 (virtutes naturales) としての枢要徳のほかにも、肝要なものとして超自然徳 (virtutes supernaturales) としての対神徳 (virtutes theologicae)、『信心仰 (fides)』、『希望 (spes)』、『愛徳 (caritas)』の三つが挙げられる。

ところでフリーメイソン (Freemasonry) の起源は一二世紀に遡りうるといわれるが、それは元来イギリスの自由な石工が自分たちの技術の秘密を守るために、『洗者聖ヨハネ (St. John the Baptist)』を守護聖人として組織した一種のギルドとしての信心会であった。だがエリザベス王朝以来、『カトリック精神が駆逐されるにつれ』、『一五四七年には Edward VI (1537—53)』によって解散させられた。

しかしその後、残党によって活動は細々と続けられていたが、その間にギルド的な性格はうすれ、石工以外のインテリにも門戸が解放されたが、それと同時に象徴的、神秘的な色彩を強め、一種の秘密結社としての観を呈するに至った。そし

て一七一七年に、ロンドンに本部を置く現在の正式のフリーメイソンとして再生したとき、それは当時のイギリスの理神論 (deism) の影響を受け、カトリック国とプロテスタント国とは多少の相違はあるが、有神論 (theism) の立場に立つキリスト教を否定して、“the overthrow of the whole religious, political and social order based on Christian institutions and the establishment of a state of things based on principles of pure naturalism” (Pope Leo XIII, 1810—1903 の一八八四年四月二〇日の回勅) を究極の目的とする団体としての第一歩を踏み出したのである。

だがその過程においては、以上述べたキリスト教の二種の重要な徳を採り入れるとともに、秘密結社として不可欠な secrecy, fidelity, obedience を重視する。そして Ernest Beha によれば、Prudence は “the quality of being wise, discreet and cautious” と定義づけられ、入会を許される早い時期に、この徳の実行が義務づけられる。

なお実行するに当たっての心得としては、ある入会式における祝辞の中で、

And if you conduct yourself in accordance with that grand admonition in the Charge, let Prudence direct you, Temperance chasten you, Fortitude support you, and Justice be the guide of all your actions...

と述べられており、また NJ によると “Old Charges” (多くの MS があり、そのもっとも重要な、また古く、よく知られているのは、British Museum にある Regius MS で、それは一三九〇年頃に書かれた七九四行の詩) では、いっさいの “wrangling, quarrelling, backbiting and slander” が禁じられていることだ。

ところで、次に問題にしなくてはならないのはカトリック国におけるフリーメイソン、およびそれと B のようなユダヤ人との関係である。

Ir 人の間にフリーメイソンが根付き、盛んになり出すのは一六世紀と考えられる。それまではイギリス人の入植者やその子孫の住む地域、いわゆる Ir 東部の Pale に限られていた。そして一七二三年か二四年に、ロンドンに次いで世界で二番目に、D に Ir 本部が誕生したと推定されている。

ところですでに触れたように、慈善的、社交的性格の強いプロテスタント国イギリスのフリーメイソンと、きわめて政治的な、イタリアやフランスなどの大陸のカトリック国におけるフリーメイソンとは性格的に多少の相違があり、したがってそれに対する認識や評価のうえでも差違があるのは当然である。では翻って、カトリック国でもとくに保守的な Ir では事情はどうであつたらうか？

カトリック教会の立場からするならば、前述の神学上の問題のみならず、一九一七年五月二七日に教皇 Benedictus XV (1854—1922) によって公布された、現行のカトリック教会法典 (Codex Juris Canonici; the Code of Canon Law) 第五卷 犯罪および刑罰 (Lib. V.—De delictis et poenis) 第二三三五条(一)の明記されてゐる——

Nomen dantes sectae massonicae aliisque eiusdem generis associationibus quae contra Ecclesiam vel legitimas civiles potestates machinantur, contrahunt ipso facto excommunicationem Sedi Apostolicae simpliciter reservatam.
(フリーメーソン結社、または教会もしくは國家の適法な権力に反して謀議する他の類似の結社に加盟する者は、その事實により当然使徒座に単純に留保される破門制裁に服する。)

ように、フリーメイソンがそもそも秘密結社であるという理由からだけでも認め難いのである。したがって Ir では、ひとびとのフリーメイソンに対する眼は一般に敵しいといつても過言ではあるまい。ただ、独立運動の盛んな、政治的な秘密結社

の多いIrでは、フリーメイソンがしばしばそれらの結社の隠れ蓑に使われることはあったが、その本来の性格では、地理的、文化的な関係もあって、むしろイギリス型であったということが出来る。

さて、つぎにIrにおけるユダヤ人の問題であるが、彼らはもう一七世紀の末には、Dにユダヤ教会堂(synagogue)を建て、公然と自分たちの宗教生活を営んでいたようである。中にはもちろんBのように、キリスト教に改宗したり、キリスト教徒と結婚したりした者もいた。だが、概してIrのユダヤ人は市民や職業人としての自由も与えられず、社会的に孤立し、つねに周囲の黙殺や偏見を、またときには敵意をも意識しなければならなかった。したがってこのような状況下に置かれたIrのユダヤ人が、異教徒のIr人との精神的な交流や社交の場としてフリーメイソンを求めたとしても少しも不思議はない。Bはまさにその一例であったのだ。

また、すでに親の代でプロテスタントに改宗し、さらにはMとの結婚のためにカトリックにふたたび改宗したBが、きわめて冷やかな偏見に満ちた周囲の視線に晒されなければならなかったのも、ひとえに以上述べたようなIrにおける複雑な宗教的な事情があったからである。〔訳〕

黒色の甲冑にて……通り来るは誰ぞ。(Who comes through Michan's Land..?) 弟の Stanislaus Joyce (1884—1955) の証言を俟つまでもなく、ジョイスは旧約聖書の「雅歌」(*Canticle of Canticles*; 欽定訳 *Song of Solomon*) を早くから愛好していた。そしてその影響は、とくに初期の恋愛詩集CMの諸篇に色濃く反映している。

例えばその VIII の第一、第二聯——

Who goes amid the green wood

With springtide all adorning her?

Who goes amid the merry green wood

To make it merrier?

Who passes in the sunlight

By ways that know the light footfall?

Who passes in the sweet sunlight

With mien so virginal?

に見られる“Who. . .”で始まる表現形式も、この問題になつてゐる。“Who comes through. . .”なども、雅歌の例え
ば6—9(欽定訳6—10)(括弧内は欽定訳)——

Who is she that cometh forth as the morning rising, fair as the moon, bright as the sun, terrible as an army
set in array? (Who is she that looketh forth as the morning, fair as the moon, clear as the sun, and terrible
as an army with banners?)

Who is this that cometh up from the desert, flowing with delights, leaning upon her beloved? (Who is this
that cometh up from the wilderness, leaning upon her beloved?)

などの影響であろう。

ちなみに旧約聖書という場合の「旧約」は、もともと古代ヘブライ語で書かれたユダヤ教唯一の聖書に対するキリスト教的な名称で、問題の雅歌にも旧約聖書のドゥエイ訳（カトリック教会用）や欽定訳（プロテスタント教会用）が依拠しているギリシア語訳のほかに、ヘブライ語の原典が存在する。

ところで、一般にギリシア語訳聖書をラテン語の七〇を意味する *Septuaginta* (E. *Septuaginti*; 『七十人訳聖書』) の名で呼ぶが、これは有名なアレクサンドリアの図書館のために、エジプト王 (Ptolemy II Philadelphus) (308—246 B. C.) がパレスチナから七十二人のユダヤ人の長老を招いて、ヘブライ語原典をギリシア語に翻訳させたという伝説にもとづいている。だが実際は、アレクサンドリアばかりでなく、その周辺に住むギリシア語を話すユダヤ移民によって長い年月をかけて翻訳され、紀元前一三二年には現存の形で完成していたと考えられている。

そしてこの翻訳の過程で、旧約外典 (Old Testament Apocrypha) と呼び慣わされているギリシア語で書かれた諸文書 (中にはギリシア語に訳されたと思われるものもある) が新たにつけ加えられた。初期のキリスト教徒 (イエスも含む) が聖書として使っていたのはこの『七十人訳聖書』などであった。

ちなみに、カトリック教会では一五四六年のトリレント公会議で外典を正典の中に加えるべきことが決議され、他方プロテスタント教会では一六一八年のドルト会議、一六四三年のウェストミンスター会議で反対の決議がなされた。その結果、旧約聖書の英訳も、外典を加えたドゥエイ訳が四六巻、外典を除いた欽定訳が三九巻となっている。

また、外典を加える以前のヘブライ語聖書は二三巻から成り、その全体を大別して、一、律法 (Heb. **תורה** = *torah*; 旧約聖書の最初の、いわゆるモーゼの五巻)、二、預言書 (Heb. **נביאים** = *nebi'im*)、三、諸書 (Heb. **כתובים** = *ketubim*) とし、さらにそのうち諸書を三部に細分している。問題の雅歌に諸書の第二部巻物 (Heb.

מִגִּילּוֹת = megillot) の第一巻歌の歌 (Heb. סִיר הַסִּרִּים = sir hassirim = Song of Songs) に相當する。

ところで雅歌は、本来は一連の祝婚歌 (epithalamium) からなる、ブライの詩集で、またその文学性のゆえにジョイスは愛誦していたのだが、そのラテン語訳は教会での、とくに聖母マリアの典礼などを通して、早くからジョイスに親しまれていたものと思われる。

事実彼が Trieste にいたとき、ある晚イタリアの劇作家で、またオペラの台本作者 Giuseppe Giacomosa (1847—1906) の *Il Cantico dei Cantici* (i.e. the Song of Songs) と題する短い喜劇を観にいった。ところが期待に反して、当時のゆき過ぎた反聖職主義の影響から問題の雅歌も被害を受け、嘲笑の対象にされた。それに腹を立てたジョイスは家に帰ってから、友人の Alessandro Francini Bruni (1878—1964) と一緒に口直して、ラテン語訳のウルガタ聖書 (Vulgate) の *Canticum Canticorum Solomonis* (i.e. the Solomon's Song of Songs) を味読したといふことである。〔訳〕

ローリの嫡男なるなるオッブルム (O'Bloom, the son of Rory)　まず “O'Bloom” は、この挿話のひとつの特色である擬古的パロディに登場する人物にふさわしく、B に Mac (Ir. Mac = a son) とともに、Ir 人 (精確にはスコットランド人、マン島人も含む) の苗字の代表的な接頭語である O (Ir. O = a grandson, a male descendant) を付けて、皮肉っぽく中世の Ir 人の騎士に仕立てた。

なお Blum またはその英語形の Bloom なるユダヤ系 Ir 人の苗字は、3—11 頁で言及される実在の歯科医 Marcus J. Bloom (1846—94?) を含むと思われる Blum 一族として、一八四〇年に初めて記録に現われる。そしてこの苗字は俗説では、花を意味するドイツ語の Blume (ドイツ人およびドイツ系ヨーロッパ人の苗字としては、このままの形か、あるいは Blume か、さうにはフランスの有名人ユダヤ系の政治家 Léon Blum (1872—1950) に見られる問題の Blum の形も使われるが、一九世紀の初めに、オーストリア、プロイセン、バヴァリア在住のユダヤ人が法律によって一定の苗字を付ける

ように強制された当時は、一般にその複数所有格の *Blumen* の語尾に *-stein, -thal, -reich, -feld, -heim* などを付けた長い名前が好まれた) に由来すると考えられている。

なお、父親の代に改姓された *Bloom* のもとのハンガリー名 *Vinag* (花) は、おそらくこのドイツ語の語源説からの類推。

また “*Rory*” [一六五の注解参照] は Ir 語のクリスチャン・ネーム *Ruarthi* (Δ *Ruab* = red) の英語形で、これはスコットランド人名の *Roderick* (O Ger, *Hr(u)odric* Δ *hrothi* = fame + *ricja* = rule) に当り、さらにはイングランド人名の *Roger* (OE *Hrothgar*, O Ger, *Hrodgar* Δ *hrothi* = fame + ger = spear) を指し示すものもある。

ところで B の父親のクリスチャン・ネームは *Rudolf* (or *Rudolph*) (O Norse *Hrólf*, O Ger. *Hrodulf* Δ *hrothi* = fame + *vulf* = wolf) で、これは英語名では *Rolf* になり、それが H 化して *Routb* になった。したがって語源的には *Rudolf* に相当する Ir 名は *Rodhulb* などであるが、それよりも上述の類似名で、とくに Ir 人名として独特の *Rory* が、それを冠した代表的な人物、Ir 最後の五〇代上王 [一五三の注解参照] といわれる *Rory* (*Roderick* or *Roderic*) O' Connor (Ir. *O' Conchubán*) との関係もあって採用されたものと思われる。

ちなみに、“*the son of Rory*” は文字通りには Ir 北部ティロン郡 [一六七の注解参照] の氏族名 *Mac Ruarthi* の英語訳でもあるが、B 家とは何の関係もない。[訳]

プリンセス・ストリートの老婆……あの御用新聞や (the old woman of Prince's street... the subsidised organ)

〔北〕プリンセス・ストリートは D 市の中心街、オコンヌル・ストリートを北に、中央郵便局の角を左に入った袋小路。中央郵便局と相對する位置。入口から少し入った左手の四〜八号に問題のプリンセス・ストリートの老婆、つまり *Freeman's*

Journal and National Press があった。

この有名な新聞はD市在住の三人の商店主を社主兼経営者として、一七六三年九月に創刊された。当初は週二回の発行で、名称も *The Public Register, or Freeman's Journal* と呼ばれていた。初代編集長は Henry Brooke (1703?—83) という当時はかなり名の知られた文筆家で、彼が事実上の創立者と考えられている。

だがこの新聞の一貫した当局に対する批判的な姿勢と人気は、当初からの寄稿者で、またきわめて密接な関係にあったIrの愛国者、だが反カトリックの医師 Dr. Charles Lucas (1713—71) [第七挿話参照] を抜きにしては考えられない。ほかに主な寄稿者としては、ルーカスが協力者であった、D Ir 議会のイギリス議会からの独立を主唱した雄弁な政治家 Henry Flood (1732—91)、フラッドの若い友人で後に彼に代って野党の指導者になり、ついには先輩の夢を実現させた Henry Grattan (1746—1820) [同上参照] などがいた。

ところが一七八三年に政府、つまりD市のイギリス総督府に買収されて、いかさま師のヒギンズ [一七七八の注解参照] の手に移った当時はまったくの御用新聞になり、グラタンは議会で “*The Freeman's Journal is a liar... a public, pitiful liar.*” と非難したことがあった。しかし彼の死後、一八二〇年代にグラタンの息子 Henry Grattan, Jr. 一八三〇年代には初めてのカトリック教徒の社主兼編集長 Patrick Lavelle の手を経て、ついに Daniel O'Connell (1775—1847) の英愛併合法撤廃同盟 (the Repeal Association or the Loyal National Repeal Association) の支持者に買収され、Sir John Gray (1816—75) [第六挿話参照] が編集と経営に当った (単独経営は一八五一年以降)。

『フリーマン』紙が民族主義者たちの代弁紙として、またIrの代表的な日刊紙として大をなすに至ったのは主としてこのグレイの力による。彼自身は新聞の経営はかりでなく、プロテスタント系の民族主義者として市会に国会に、はたまた貧民の救済に精力的な活躍をした。現在でもオConnell・ストリートには彼の銅像が立っている [同上参照] が、これはD市への近代的な給水法を確立した功績を記念してである。

その後も『フリーマン』紙の経営は代々グレイ家によって行われ、父の死後それを受け継いだ Edmund Dwyer Gray (1845—1883) は、パーネル [1—166の注解参照] と同じ党に属していたが、一時党首のパーネルに卑怯者と非難されたほど政治的には隠健で、またきわめて慎重であったために、彼の編集する『フリーマン』紙も過激な民族主義者や愛国主義者からは軽蔑の眼で見られるようになった。しかし彼の生前には、民族主義的な、パーネル支持の唯一のカトリック系日刊紙として、ともかくその名声を保っていた。

ところが次の若い Edmund Dwyer Gray, Jr. の代になると、とくに国論を二分したパーネルの不倫事件 [1—167の注解参照] の帰結として、パーネルがカトリック教会では、法度の離婚経験者キティ・オッシュェイ [同上参照] との結婚に踏み切ったのを契機に、当初のパーネル支持から反パーネルに一八〇度経営方針を転換。一八九二年には新たに社長として、変節した反パーネルの Thomas Sexton (1848—1932) が就任 (一九二二年まで)、編集担当重役には William Henry Brayden (1865—1933) [第七挿話参照] がなった。またそれとともに、それまで反パーネルの論陣を張っていたライバルのパーネル失脚の首謀者 Timothy Michael Healy (1855—1931) [第七挿話参照] 一派の *National Press* を買収、統合した (その際ヒューリは、この新しい新聞の役員からは除外された)。

パーネル事件で分裂していた自治党 (Irish Home Rule [Parliamentary] Party, Irish Parliamentary Party, or Irish Nationalist [Parliamentary] Party) が、ヒューリ (再建後の1—12月に除名) や William O'Brien (1852—1928) (一九〇三年一月に、一九〇二—三年の土地会議 [The Land Conference] の評価をめぐって同志とともに脱党) と、いった強力な、旧パーネル反対派を内に抱えながらも、一九〇〇年にパーネル派の残党のひとり John Redmond (1856—1918) を党首として曲りなりにも統一、再建されて以来、『フリーマン』紙は穩健な民族主義路線を採るレッドモンド下の自治党を支持していた。

だが、やがてIrの政治状況がこのような穏健路線からシン・フェーン〔1—四七参照〕のような急進的な傾向に取って換えられるにつれて、『フリーマン』紙もしいに時代の趨勢から取り残され、一九一六年四月二四日のいわゆるEaster Risingでは社屋を焼失。その後さっそく再建されたにもかかわらず、北Irを分離した形での独立戦争の休戦とIr自由国の誕生を歓迎し、またI. R. A. (Irish Republican Army)と敵対関係にある自由国軍を支持する記事を載せたため、今度は一九二二年三月の末に彼らの襲撃を受け、完膚なきまでに破壊されてしまった。その後はIr政府の援助をえて、再三にわたって再建を試みたが成功せず、一九二四年にその一六一年に及ぶ永い歴史を閉じ、次に話題になる『アイアリッシュ・インディペンデント』紙に統合されてしまった。

なお、Bは第七挿話その他で言及されているように、問題の『フリーマン』紙の広告勧誘員ということになっている。

つぎに『フリーマン』紙の綽名「プリンセス・ストリートの老婆」(確認されたわけではない)についてであるが、これはthe Bank of Englandの綽名“Old Lady of Threadneedle Street”や、上海で発行されていた*The North China Daily News* (一八五五—一九五〇)に対して中国在留のイギリス人がつけた綽名“Old Lady of the Bund”を見てもわかるように、問題の綽名もIrを代表する古い新聞社に付けた愛称。〔訳〕

誓約に縛られた……国会議員連中 (the pledgebound party on the floor of the house) Isaac Butt (1813—79) が一八七三年に設立した自治連盟 (Home Rule League) を母胎として、翌七四年の総選挙の結果誕生したIr自治党〔4—一八参照〕の五九名の党员予定者が初めて会合したとき、一種の誓約とも考えられる決議 (これはのちに“Constitution of 1874”として知られるようになる) をした。それは国民的な要請であるIrの自治を獲得するために下院に独自の政党を結成し、他の与野党いずれの党员とも提携することなく、目的遂行のために全員が一致協力する必要があるというもので、これは出席者全員によって支持され、また党员になる前に署名することが要求された。したがって問題の自治党は結党の当初から誓約

拘束の団体であったということが出来る。だが実際には、バットの指導下においては、この誓約は黨員の自由意志に任せ、また内外の事情からほとんど拘束力を發揮することはなかつた。

この党はその後バットの死によつて William Shaw (1823—95) にひき継がれ、ついで一八八〇年の総選挙後、五月にパーネルが党首となつてからは、当時パーネルやデイヴィットらを中心に勢いを得ていた、いわゆる土地戦争 (Land War) 「1—六六の注解参照」を勝ちぬぐために、いさうの團結の必要が痛感された。その結果、誓約に多数決の原則が導入されたが、それでも、まだ当時は拘束力はさほど厳しいものではなかつた。

ところが一八八四年八月に起草され、翌年の総選挙に當つてはじめて自治党の全立候補者に適用された誓約は、いかなる留保や条件も除外したきわめて強制力に富んだもので、この意味から “pledge-bound party” といはば、パーネルの主宰するこの政党を指す代名詞のようなものになつた。パーネルの盟友のひとり Timothy Charles Harrington (1851—1910) の手になるその内容は以下のごときものであつた——

I...pledge myself that in the event of my election to parliament I will sit, act and vote with the Irish parliamentary party and if at a meeting of the party convened upon due notice specially to consider the question, it be decided by a resolution supported by a majority of the entire parliamentary party that I have not fulfilled the above pledge I hereby undertake forthwith to resign my seat.

やがてこの誓約制度は若干弛められて、当選後に行なわれるようになったが、その道徳的な拘束力はいぜん大変なもので、党の規律と團結を重んずるその政策は、有名なイギリスの自由党の宰相 William Ewart Gladstone (1809—98) がパー

ネルとの連携にもとづいて、自治法案その他の重要案件を推進するうえできわめて強力な院内援護となった。

先述のように、その後のパーネル事件による党の分裂を経て、ようやく一九〇〇年にジョン・レドモンドを中心に再建されたが、その後もヒーリヤオブライエンのような爆弾の後遺症に悩まされ〔4—18参照〕、また一九〇四年当時の政治状況からすれば、英愛併合支持者であるユニオニストからなる保守党の長期政権下に、自治党の最大の公約であった併合撤廃によるIr議会の独立と、地方分権的なIrの政治的な自治を達成する見込みはまったくなく、政治的に沈滞した、いわば端境期にあたっていたために、とうていパーネル時代のような強力な指導性は期待すべくもなかった。だが幸いにも、まだシン・フェーン〔4—19参照〕の勢力もさほどではなく、国内にそれと対抗できるような政党が存在しなかったので、レドモンドもどうか党内の統一を保持することができたというのが実情であった。〔訳〕

パーネルが発刊した……『アイアリッシュ・インディペンデント』(the Irish Independent... founded by Parnell)

パーネルの情事が発覚してのちも終始一貫して彼を支持し続けてきた『フリーマン』紙〔4—16参照〕が、ついに一八九一年九月二一日に、非難ごうごうたるキティ・オウシェイとの結婚(六月二五日)を理由にパーネルを見捨てた〔4—18参照〕とき、さっそくパーネルは自分の政治的な立場を擁護する機関紙 *Irish Daily Independent* の発刊を計画した。だが、けっきょくは彼の存命中(一〇月六日死亡)には間に合わず、年内の一二月一八日になってやっと第一号が陽の目を見た。

この新聞は発足当初はIr共和主義同盟(U. R. B. = Irish Republican Brotherhood)〔1—18の注解参照〕のメンバーを多く採用していたため、その事務所はさながら内外の共和主義者の溜り場の観があった。そして一八九〇年代はレドモンド〔4—18参照〕の支配下にあったが、やがて財政難におちいり、一九〇〇年には、William Martin Murphy (1844—1991)〔4—14参照〕の主筆する *Daily Nation* (かの有名な Charles Gavan Duffy [1816—1903] や Thomas Osborne Davis [1818—45] の *Nation* の復活後身) を吸収する形でマーフィの傘下に入り、名称も *Daily Independent and*

Nation と変り、かろうじて『フリーマン』紙との合併を免れた。

このマーフィーという人物はヒーリ〔4—18参照〕の親友であった。したがって『インディペンデント』紙がマーフィーの手中に落ちたということは、それがヒーリの宣伝機関になったことを意味していた。案の定『インディペンデント』紙は一九〇四年にはマーフィーに買収され、翌五年には *Irish Independent* として生れ変わることになる。

この『アイアリッシュ・インディペンデント』紙は、さすがに経済人マーフィーの経営する新聞だけのことはあって、Irでは初めての半ペニーの商業新聞で、またカトリックの中産階級に広く読まれた。ちなみにこの新聞は現在もマーフィー一族を社主に、Ir最大の発行部数を誇っている。姉妹紙に *Evening Herald* と *Sunday Independent* とがある。

なお、『フリーマン』紙はこの『インディペンデント』紙に吸収された。〔訳〕

ゴードン——エクセター市バンフィールド・クレメント…… (Gordon, Barnfield Crescent, Exeter. . .) 以下の『アイアリッシュ・インディペンデント』紙の誕生、結婚、死亡通知欄からの音読は、実際に同紙の一九〇四年六月一六日号からの引用である。だが市民が『インディペンデント』紙を揶揄するために、わざとIr人を飛ばしてイギリス人のみを読み上げているという事実は、実際のそれぞれの欄の原文と比較してみないとわからない。そこで以下にNに収録されている記事を引用する。アンダーラインの個所が採り上げられている。

まず誕生欄であるが、市民はIr生れの三人を飛ばしていきなりゴードンから入る——

Gordon — 11 June 1904, at 3 Barnfield Crescent, Exeter, the wife of W. Gordon, M. D., [fellow] of the R[oyal] C[ollege] of P[hysicians], of a son.

Redmayne, 12 June 1904, of Hfey, St. Anne's-on-the Sea, the wife of William T. Redmayne, of a son.

次に結婚欄ではIr人の二組を飛ばして、もうひと組 Wright and Flint の名前だけを挙げ、以下のイギリス人のカップルを問題にする——

Vincent and Gillet——9 June 1904, at St. Margaret's, Westminster, by the Rev. T. B. F. Campbell, third son of Thomas Vincent, Whinburgh, Norfolk, to Rotha Marian Gillett, younger daughter of Rosa and the late George Alfred Gillet, 179 Clapham Road, Stockwell.

Haywood [not Playwood] and Ridsdale——8 June 1904, at St. Jude's, Kensington, by the Very Rev. Dr. Forrest, Dean of Worcester, assisted by the Rev. W. H. Bliss, Vicar of Kew, Charles Burt Haywood, only surviving son of the late Thomas Burt Haywood and Mrs. Haywood, of Woodhatch, Reigate, to Gladys Muriel, only daughter of Alfred Ridsdale, of Hatherly House, Kew Gardens.

最後に死亡欄では、市民は六人のイギリス人とひとりのIr人を飛ばして以下から入る——

Bristow——11 June 1904, at 'Fernleigh', Whitehorse [not Whitehall] Lane, Thornton Heath, London, John Grosling Bristow.

Cann [not Carr]——12 June 1904, at Manor Road, Stoke Newington, Emma, daughter of the late W. A. Cann, of gastritis and heart disease.

Cockburn——10 June 1904, at the Moat House, Chepstow, after a short illness, Frances Mary Cockburn, in the

60th year of her age.

Dimsey—13 June 1904, at 4 Crouch Hall Road, Crouch End [England], Martha Elizabeth, the Wife [sic] of David Griffiths Dimsey, late of the Admiralty.

Miller—14 June 1904, at Northumberland Park, Tottenham, George Clark Miller, in the 85th year of his age [*not* “aged eightyfive”].

Welsh—12 June 1904, at 35 Canning Street, Liverpool, Isabella Helen Welsh.

トートマン・ムーニー (Martin Murphy) [4—11参照]。Bantry (Ir. Deamnatáse=“descendants of Beann, one of the sons of Conor Mac Nessa, King of Ulster in the first century”) 生れの実業家、政治家。D の Belvedere College (ジュイスの母校でもある) 卒業後、一九歳で父を失い、家業の建築請負業を継ぐ。持ち前の進取の気性とヒジネスの才覚から事業を拡大して、Ir のいたる所の教会、学校を建築し、橋を建設するとともに、国内ばかりではなくイギリス、アフリカ、南米に鉄道や市街電車軌道を敷設した。その結果、彼はD連合市街電鉄会長、Ir 大南・西部鉄道取締役であった。D市聖パトリック選挙区選出の下院議員(一八八五—一九二)。一九〇七年のIr万国博覧会の主たる推進者であるとともに委員長。D市商業会議所会頭(一九二—一九三)。さらには一九一五年以降は総督府赤十字病院の財務・総務委員会会長をつとめるとともに、先述のように『インディペンデント』紙[4—11参照]その他の新聞や、D市の一流ホテル、デパートの所有者であった。

またその経歴が示すように、彼はIrを代表するきわめて政治的な財界人で、一九一三—四年のJames Larkin (1876—1947) や James Connolly (1868—1916) の指導する運輸・一般労働者組合の一六ストライキのときには、経営者のドンとしての危機感から、以前からあった雇用者連合を拡大組織して率先その鎮圧に乗り出した。[訳]

三十七頁 グリーン・ストリート(Green street) D市北岸、ケイベル・ストリート〔1―3八の割注参照〕の西に、それと並行して北キング・ストリートから南に、リトル・ブリテン・ストリートに至る狭い通り。この1―1号にD首都警察D管区警察署が、また反対側の二五号にはC管区警察署派出所がある。ちなみにそれと隣接した二六号には、地裁法廷とD郡市公安委員事務所の建物がある。

なお、ブリーンのお目当ての私服刑事が詰めているところは、D市南岸の中心街、デイム・ストリートから南に入るエックスチェインジ小路の三、四号の私服刑事部である。〔訳〕

のっぽのジョンはマントジョイ刑務所のあの男を…… (When is long John going to hang…) こののっぽのジョンは創作上の人物。姓は Fanning。彼はUではD市副公安官〔第一〇挿話参照〕とある。ちなみにDの一篇「恩寵」では、「市の登記事務官で市政の黒幕」と説明されている。

ところで問題ののっぽのジョンのモデルは、一九〇四年当時の実在の副公安官 John Clancy (D市北岸、第一挿話の舞台オーモンド・ホテルのある、アバ・オーモンド河岸通り三〇号のD市公安官事務所勤務)。彼の自宅は北岸のクロンターフ地区〔1―五五の注解参照〕ホリブルック道路四二号のアーディヴィン・ハウス。ちなみに彼はFWでは実名で登場する。

なお、彼はジョイス一家が一八九四年末〜九六年に北リッチモンド・ストリート (D市北岸、運河内の旧市内北東部の袋小路) 一七号に住んでいたときと同じ町の住人。ジョイスの父 John Stanislaus Joyce (1849—1931) の友人の Alfred Bergan (Uにも実名で登場〔1―三六以下参照〕。職業も同じ) はこの克蘭シイの助手であった。

ところでNなどによれば、克蘭シイはかならずしも自分の職業に忠実ではなく、Dでめったに行われたことのない絞首刑の準備をするのも気が進まず、もっぱらバーガンに委せっぱなしであったという。

ちなみに、一九〇四年六月一六日の「ブルームの日」に、マウントジョイ刑務所には死刑囚はいなかったが、殺人の容疑

で再審理を待っている囚人がいた。それは Thomas Byrne という D 市民で、同四年三月二十七日に妻を殴り殺したとのことであった。

第一回目の裁判は同四年六月九日に結審したが、陪審員内の意見の分裂のために未決に終わったのであった。このときの裁判長は悪名高きビータ・オブライアン〔一八九五の注解参照〕で、彼自身は事実上、有罪判決を指示していたといわれる。

またこのときの裁判をめぐってはいろいろ取り沙汰されたが、バーンは再審の結果、一九〇四年八月二日に有罪と決定し、同年九月六日に死刑が執行された。〔訳〕

かの蒼れ高き雙生の……アイヴァと……アーティローン (the noble twin brothers Bungevagh and Bungardlann)

アイヴァとアーティローンは双生児ではなく兄弟。じき Sir Benjamin Lee Guinness (1798—1868) の長男が Sir Arthur Edward Guinness, 1st Baron Ardilaun (1840—1915) と、三男が Edward Cecil Guinness, 1st Earl of Iveagh (1847—1927) である。

長男のアーサは、弟のエドワードも同様だが、クロンターフ〔4—25参照〕の生まれで、イギリスのイートン校を経て、D のトリニティ・コリッジ卒業。一八六八年の父の死後は、若くしてギネス醸造を受け継ぎ、七七年に引退するまで社長を務めた。彼はまた保守党国会議員（一八六八—九、一八七四—八〇）、王立 D 協会長（一八九七—一九一三）を歴任。社会事業家としては、マーシュ図書館の建物を復元した。

なお、この図書館は Jonathan Swift (1667—1745) で有名な St. Patrick's Cathedral に近接して、D 大主教 Narcissus Marsh (1638—1713) によって建てられ、一七〇七年に開館された。最古の公共図書館。但し正式の名称は the Library of Saint Sepulchre (〔キリストの〕お墓図書館) という。

彼はまた Coombe 産院を再建、拡大し、労働者の住宅の改善に努め、またジョイスの憩いの場であった “Stephen's, my

Green”（つまり町のと真中の公園として有名な St. Stephen's Green（園内に立派な彼の銅像がある）の土地を買い、設計、完成して、それを市に贈った。また一九〇〇年には、反カトリック、反自治主義のユニオニスト〔4—21参照〕の立場を擁護するために、*Daily Express* と *Dublin Evening Mail* を買収した。

ちなみに、彼が弟のエドワードと共同でした事業としては、例えば一八七二年に開催されたD芸術・科学博覧会がある。

次に弟の方は個人教授をへて、兄同様にトリニティを卒業。父の死後家業の経営に加わり、一八八六年に会社が法人になるとともに会長、三年後には名誉会長。それと同時に社会福祉事業に専念し、D市の貧民窟の除去や労働者の生活条件の改善に大いに貢献した。

一九〇〇年以降は主としてロンドンに住むようになったが、Irに対する関心は失わず、一度ならずD市の病院のために寄付をしたり、あるいはまたトリニティ・コリッジの総長（一九〇八—二七）として、母校の教育のために財政的な援助を惜しまなかった。〔訳〕

永^{とこしえ}なるレ^レダー^{たしえ}の息^{むすこ}子^こ (the sons of deathless Leda) *Αἰῶνα* (i.e. Leda) と *Ζεὺς* (i.e. Zeus) との間に生まれた男の双生児を^{とくに} *Διοσκουροί* (i.e. Dioscuri=Zeus' sons) と^ふつ。

Kástrap (i.e. Castor) は馬の調教に優れ、*Πολυδευξ* (i.e. Polux or Polydeuces) はボクシングやレスリングに秀でていた。またポリュデウケースは元来不死であったが、カストールが殺されたとき、自分が死ぬか、カストールを生き返らせてほしいと願い出たので、ゼウスはふたりが一日おきに、代るがわる神々と人間とのあいだを往き来するのを許した。

ふたりはこのようにいかなる時にも離れることがなかったので、*Σπάρτα*で、また後にはローマや *Tusculum* (ローマの南二四キロの、*Latium* 地方の古都)で、とくに兄弟愛の典型として崇拜され、またそのゆえに、天上の双生児 (*geminii*) として星座の中に加えられた〔4—16〇参照〕。

ふたりはまた武勇、航海、接待の保護者としても崇められたが、一方リーダーは、とくに入浴中に白鳥の姿をしたゼウスに言い寄られ、卵からカストールとポリュデウケースらを生んだが、両者が抱擁する姿は Leonard da Vinci (1452—1519) 以来恰好の画題となり、不朽の生命を得た。

また W. B. Yeats (1865—1939) はこの神話に独特の解釈を与え、リーダーの懐妊を聖母マリアのそれと関係づけ、それに歴史的な意義を与えた。

なお N] によれば、弟のエドワードは有名なサラブレッドの厩舎の所有者であったとのことである。〔訳〕

魚の水を得たるが如く (as to the manner born) これは元来は『ハムレット』1—4の一五行の句であるが、いまではむしろ常套句になっている。

Eric Partridge (1894—1979) の *A Dictionary of Cliches* によれば——

to the manner born; esp. as to the... with natural ease, as though one were born with the knowledge of what to do or how to do it: mid C. 19—20.

とある。〔訳〕

……青銅の硬貨一枚 (a testoon of... bronze) の “testoon (teston or tester)” という名称は、元来はイタリアの ミリノ公爵 Galeazzo Maria Sforza (1444—76) によってミリノで鑄造された銀貨に公爵自身の顔が鑲刻されていた関係から “testone” (augmentative of *testa* [= head]) と呼ばれたのに由来する。

同種、同名の銀貨はその後フランスとイギリスでも造られ、イギリスでは Henry VII (1457—1509) の治世 (一五〇九

一四七)に鑄造された、王の肖像つき一シリング銀貨が最初。

ところが次の Henry VIII (1491—1547) の治世 (一五〇九—一四七) の一五四三年から用いられた一シリング銀貨は、銅を三分の二も混ぜた粗悪品で、間もなく王の顔の鼻の頭にも赤い吹出物が出たほどであった。もちろん価値も見るみるうちに半分の六ペンスに下落してしまった。

一六世紀の中頃に成立したイギリスの諺に、“Testoons are gone to Oxford to study in Brasenose.” というのがある。これはイギリスの劇作家 John Heywood (1497?—1580?) の *A dialogue containing proverbes and epigrammes* (1562) に収録されているが、問題の粗悪な銅貨なみのテストン銀貨を皮肉ったもの——

Of testons. Testons be gone to Oxforde, god be their speede : To studie in Brasenose there to proceede.

Of redde Testons. These Testons looke redde : how like you the same ? Tis a token of grace : they blushe for shame.

なお、文中の“Brasenose” というのは、たまたまヘンリ八世が即位した年とおなじ一五〇九年に、オックスフォードに創設された Brasenose College のことで、その学寮の入口の上に飾られた寮章の真鍮製の鼻に、先述の王の鼻の頭の吹出物をひっつけたもの。もちろん銀貨は銀と銅との合金で鑄造されるものだが、素人の一般大衆には銅と真鍮との見分けがつかず、両者はしばしば混同された。

ちなみに二ペンス、一ペンス、半ペンスなどの銅貨は、一八六〇年以来青銅貨になった。またここで言及される「青銅の硬貨」は一ペンス青銅貨のこと。〔訳〕

ブラウンシュヴァイク公爵家 (the house of Brunswick) ドイツ諸侯中の有力な家系であるヴェルフ (Welf) 家の流れを汲むオット四世 (Otto IV, 1174?-1218) の甥ペーハインリッヒ獅子公 (Heinrich, der Löwe, 1129—95) の孫にあたるオット小児公 (Otto, das Kind, 1204—52) が、一二三五年にブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公職 (Herzog von Braunschweig-Lüneburg) に封せられたが、その後公爵家はツェルのヘルンストー一世公 (Ernst I, von Zell, 1497—1546) の死とともに分裂して、分家がブラウンシュヴァイク＝リューネブルク公爵領を継ぎ、ヘルンスト・アウグスト (Ernst August, 1629—98) 公の代になって、ドイツ西北部プロイセンの一州ハノーヴァ (Hannover, E. Hanover) の初代選帝侯になった (一六九二)。このころの長女の二代選帝侯ゲオルク・ルートヴィヒ (Georg Ludwig, 1660—1727) が、一七一四年にイギリス王 George I (George Lewis) として即位し、ハノーヴァ王家を起したのだ。

以後ひとと徳子のシモーシニ世 (George Augustus, 1683—1760) の孫のシモーシニ世 (George William Frederick, 1738—1820) の長子シモーシニ世 (George Augustus Frederick, 1762—1830) の弟第ニナントリマニ世 (William Henry, 1765—1837) の子第ニナントリマニ世 (Edward Augustus, Duke of Kent and Strathern (1767—1820) のむら娘 Queen Victoria (Alexandrina Victoria, 1819—1901) と続き、彼女の死をもつて狭義のハノーヴァ王家は終わった。〔訳〕

三八頁「最高権威として……印度の女帝」(Her Most Excellent Majesty... Empress of India) シモーシニ世はヴィクトリア女王の正統の肩書き “Her Most Excellent Majesty, by grace of God of the United Kingdom of Great Britain and Ireland and of the British dominions beyond the sea, queen(sic), defender(sic) of the faith(sic), Empress of India” と書くべきが、*Thom's Dublin Directory* (1899) にあるが、それはいささか——

Her Most Excellent Majesty Victoria, of the United Kingdom of Great Britain and Ireland, and of the Colonies

and Dependencies thereof in Europe, Asia, Africa, America, and Australasia, Queen, Defender of the Faith, and Empress of India.

また、ヴィクトリア女王の長男のエドワード七世（一八四一—一九一〇、治世一九〇一—一〇）の肩書は、*Thom's Dublin Directory* (1904; 1905) によれば——

His Most Excellent Majesty Edward the Seventh, of the United Kingdom of Great Britain and Ireland, and of the British Dominions beyond the Seas, King, Defender of the Faith, and Emperor of India.

とある。

これらの肩書を比較すると、Uではまず“by (the) Grace of God”が書き加えられ、さらに本来ヴィクトリア女王の肩書にはなく、エドワード七世の代になって書を換えられた“of the British Dominions beyond the Sea(s)”が書かれてい
る。

前者はすでにヘンリ八世（一四九一—一五四七）の肩書に見られるから、正式にはその文句が必要と思われるが、後者は明らかにヴィクトリア女王の肩書としては不適當である。この間違ひは、AUによれば、ジョイスが *Thom's Dublin Directory* (1904) を参照した結果だといわれている。

ちなみに、現在のエリザベス女王（一九二六—）の肩書は——

Elizabeth II, by the Grace of God, of the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, and of her other Realms and Territories, Queen, Head of the Commonwealth, Defender of the Faith.

といひ、その正式の訳語は——

神の恩寵によりグレート・ブリテン及び北アイルランド及び他のあらゆる版図並びに諸領土の女王、連邦首長、信仰の擁護者であるエリザベス二世

とごんとの British Council の返事であったので、われわれの訳語もそれを参考にした。〔訳〕

三九頁 連中ときたら……奴をむりやり墓に入れちまったんだぜ (They took the liberty of burying him) この冗談はスイ

フト〔4—26参照〕の *A Complete Collection of Genteel and Ingenious Conversation* (1738) から出ている。

Swiff's Polite Conversation, Annotated by Eric Partridge の 74 ページを開く——

Colonel Atwit... But is it certain that Sir John Blunderbuz is dead at last?

Lord Sparkish. Yes, or else he's sadly (=gravely) wrong'd; for they have bury'd him.

四〇頁 幽霊の両手 (spirit hands) 以下に叙述されるのは、霊媒 (medium) を介して降霊術 (spiritism or spiritualism) を行う文霊会 (seance) の状況のシロカイである。さうして以下に一般的な文霊会の実状と思われるものを紹介する。

だがその前に、まず降霊術が効果的に行なわれて、心靈現象の発現を最大限に發揮させるための条件として、第一に会場
の照明の如何が問われる。すなわち、心靈現象の発現にはUの本文にあるように、暗いほどよいことになる。

つぎに参会者はテーブルのまわりに腰掛け、その上で隣り同志の手を重ね合せて環を作る。この環はいろいろな心靈現象
を出現させるための第二の条件である。

霊媒が入神状態 (trance) に入るとともに、いろいろな心靈現象が出現するが、それらを大別すると、物理的現象
(physical phenomena) と精神的現象 (psychical phenomena) に分かれる。

前者については、まず霊が叩音 (rap) やテーブルを傾けて自己の存在を知らせ、次に物品移動や物品、人体浮揚現象
(levitation) が出現する。またそれとともに一方では、霊媒の身長増加 (elongation) が見られる。

こうなると、もう物理的的心灵現象がつきつきに現われ、例えばロックされたドアや戸棚がひとりで開いたり、物品引寄
せ現象 (apport) によって、障害物を貫通して物品が移動する。重いものが軽くなったり、軽いものが重くなったり、霊媒
が耐火性を發揮したり、楽器がひとりで演奏されたり、楽器がないのに音楽が聞えてきたり、霊媒を介さないで霊が直接
石板に文字を書く石板書記 (Slate-writing) 現象が見られたり、ドアや窓が閉められているのに微風が起り、カーテンや衣
服が風にゆられて脹らむ。

またUの本文にあるように、故人の手や顔と思われる発光体が空中を浮遊し、参会者に触れ、また愛撫までする。そして
大成功の場合には、完全な霊の形体が物質化し、現実的な物質霊となる霊の物質化現象 (materialization) が起る。そして
この物質化した靈魂は部屋中を動き回り、参会者に触らせたり、現実の姿で直接友人や知人と話し合ったり、頭髮や衣服の
一部を彼らに与えたりする。

つぎに精神的的心灵現象について一言すると、その純粋なものとしては、霊媒を通じて発現する現象、例えば自動書記

(automatic writing) や靈言現象 (spirit speaking) が挙げられる。

前者は靈媒が精神を鎮めて受身の状態になっていると、自分の顕在意識とは別と思われるもうひとつの意識 (靈媒の指導靈のこともあり、靈界居住者、ときには本人の潜在意識や他人の暗示などのこともある) が働いて手を動かし、ひとりて文章や画や音楽作品が書かれる現象である。それが現われるのはなにも交霊会場とは限らないが、やはりそのような場所の方が好ましいことは否定できない。

また神託や、Uの本文で叙述される靈との問答を含む後者の現象は、日本でも青森県恐山の巫女いたこの口寄せで知られているのでここでくたくだ述べるのは遠慮する。

ところで物理的心靈現象のところで言及した、靈の物質化現象というのは如何にして起るのであろうか? この問いに答えるためには、まず靈体 (広義の) の構造を知らなければならない。Uの本文と関係があるのでつぎに考察することにする。

日本心靈科学協会の説によれば——

死後の靈魂の住む世界を一括して広義の靈界 (spirit world) といひ、これをいくつかの世界に分けて……幽界 (astral world) と狭義の靈界 (spirit world) と神界 (mental world) とに分ける。

近代心靈研究の教えるところによれば、人間は我わが (魂 spirit, soul) と我の靈界における表現体たる幽体 (astral body) と我の現界における表現体たる肉体 (physical body) とから成り、神界においては我 (大我)、すなわち本体のみとなる。また……生前は幽体は肉体と浸透し重なり合っているが、死に際して幽体は我と共に……肉体から離れ、以後は (広義の——筆者注) 靈界の住人となる。現界は我と物質の世界であり、靈界は我と形 (色のある) の世界である。幽体が肉体と浸透

し合っているように靈界も現界と浸透し合っている。現界では肉体が肉眼に見えるように、靈界では幽体が靈界居住者に靈視され、人間の靈視能力者にも靈視される。

Uの拙訳〔1—40〕を見ていただくと、この項で問題にしている「幽質の両手」と後出の「幽質副体」という表現が出てくる。この「幽」は先刻お気づきのように、上述の幽体と関係があり、以下にそのことについて考察をすすめたい。

まず幽質副体であるが、これはUの原文では“the etheric double”とある。もちろんエーテルと関係のあることはわかるのだが、ではこれは心靈字ではなにを意味するのであろうか？

その方面の専門書に当たってみると――

Ether Double is, in Theosophy, the invisible part of the ordinary, visible, physical body which it interpenetrates and beyond which it extends for a little, forming with other finer bodies the “aura”. The term *etheric* is used because it is composed of that tenuous matter by the vibrations of which the sensation of light is conveyed to the eye. This matter, it must however be noted, is not the omnipresent ether of space, but is composed of physical matter known as etheric, super-etheric, sub-atomic, and atomic. The term *double* is used because it is an exact replica of the denser physical body. The sense organs of the *etheric double* are the *chakrams** and it is through *chakrams* that the physical body is supplied with the vitality necessary for its existence and its well-being during life. The etheric double thus plays the part of a conductor, and it also plays the part of a bridge between the physical and astral bodies, for without it man could have no communication with the astral

world and hence neither thoughts nor feelings... During sleep it does not leave the physical body... Shortly after death, the *etheric double* finally quits the physical body though it does not move far away from that body, but is composed of the four subdivisions of physical matter above alluded to. With the decay of the latter, the *double* also decays and thus to a clairvoyant, a burying ground presents a most unpleasant sight.

* a corrupt form of cakras? cf. "*Chakras*: These are, according to theosophists, the sense organs of the ethereal body..."

(*An Encyclopaedia of Occultism*, 1960)

とある。だが問題の幽質の考え方は一九世紀の科学的な仮説の転用であり、また逆用であることが指摘されている——

Ether refers to the all-pervading ether of 19th-century science and to the 'magnetic fluid' or 'aetheric continuum' of Mesmer (i.e. Friedrich Anton M., 1734—1815) and his followers, which was thought to permeate the universe and provide a medium through which spirit and matter could influence each other.

(*Encyclopedia of the Unexplained*, 1974)

これらの引用から、肉体と幽体との間にエーテル体という霊体の構成物体が考えられていることが明らかである。またそのエーテル体の構成物質の振動によって、光の感覚が眼に伝えられるということは、霊の物質化が行なわれ、眼に見えるた

めには、この物質の参与が絶体に欠かせないということである。

また「Z」がいうように、ディグナムの霊の場合は死後あまり時間がたっていないので、エーテル体が分解消滅する以前の状態にあることも考えられる。つまり後出のUの本文によれば、それは目下のところまだ幽界の下層 (the lower astral levels) にあるわけである。だがいずれにしても降霊の方法は同じで、ディグナムの霊の場合はより容易であったというだけのことである。

ところでUの本文によると、ディグナムの霊は肉体を持った人間と同じように、思想や感情を具備している。つまりは問題のエーテル体と幽体との両者を兼備しているということである。ところがそのエーテル体であるが、きわめて残念なことに、日本語にはそれに対する漢語がない。それは中国語とでも同じで、「以太」という音訳しかない有様。したがって、訳者がエーテル体に近似した漢語として「幽質」という表現を採用した苦渋をおわかりいただけるのではなからうか？ というのも、最初に述べたように、しょせんこの状況は降霊術のパロディだからである。

ちなみに、原文の“spirit hands”は仏訳の“une main fluidique”に依拠し、また“fluidic”については次の OED の解説によった——

Spiritualism. Of or belonging to a supposed supersensible 'double' (of 'fluid' or ethereal consistence) possessed by every being.

また中国語では、“astral body”の心靈学的な訳語としては「靈体」しかなく、“astral spirit”についても「幽靈」あるいは「星靈」としか載っていない。〔訳〕

タントラ (tantras) いまづそタントラ教 (tantrism) といえ、大宇宙である絶対的な世界と、小宇宙である人間のな世界とが、本来は一体であるべき超越的な自我、つまり大我を顕現させようとする、西欧思想に汚染されない「東洋の知恵」として称揚されるが、ジョイスがUを書いた戦前には、タントラ教といえはわがわがしい、呪いじみた野蛮な教えだと理解されていた。

そもそも तन्त्रा (ie. tantra, 「恒特羅」) とは、サンスクリットの織機とか経糸の意味で、緯糸である तन्त्रा (ie. sūtra, 「仏教」経、經典、「波羅門教」箴言、箴言集) に対するものである。

もちろんその語源についてはいろいろな説があるが、要するにタントラとはスートラが思想的な内容に力点があるのに対し、実践面に重きが置かれた聖典である。なお、この語が聖典の意味で用いられ始めたのは七世紀ごろからで、八世紀以降は聖典はほとんどこの名称で呼ばれるようになった。

ところで本来は雑密ともいうべき、文化の下層としてのタントラ教は、太古以来のインド民衆の日常生活や宗教生活の基盤であって、「神々への讃歌、儀礼、祭式といった宗教的な行為から、法律および錬金術などの化学、さらには医学、薬学、天文学といった自然科学に類するもの、それに妖術、呪術、降神術、占星術、卜占などの神秘現象にいたるまで、一切合財を……取りこんでいる。」(松長有慶)。

だが神智学 (Theosophy) では、先述のように、タントラ文献は “certain mystical and magical works” (*Theosophical Glossary*)’ ॐॐॐॐ “one of the class of Hindu religious works in Sanskrit... chiefly of magical and mystical nature” (OED) とつての性格に力点が置かれていながら、それらの中に “speculations on alchemy, medicine, divination, astrology, horoscopy, and many similar pseudo-scientific subjects, which frequently make their appearance” (Benoytosh Bhattacharyya, 1897—1962) とつた側面が強調されていっている。[訳]

卍位米 (jivic rays) cf. “JIVA: Sanscrit word referring to life apart from any attributes or qualities that a living being may have; Life principle.” (*A Dictionary of Esoteric Words*)’ 卍位米 जीव (i.e. Skr. jivā) = “living being, life, the highest personal principles of life” (*A Supplement to OED*) [説]

腦下垂體…… 薩摩訶大陽神祕藥 (the pituitary body... the sacral region and solar plexus) 前述のちんちん、宇宙と人間との一体をめぐすタントラ教の立場からは、とうぜん現実的な肉体の諸条件が重視される。すなわち——

On the practical side, which obviously is the fundamental side of the Tantras, the most important thing is the stress laid on the body as the medium in and through which truth can be realised... the Buddhist Tantrika (i.e. Tantrist)s, in unison with the other schools of Tantra, hold that the body is the abode of all truth; it is the epitome of the universe or, in other words, it is the microcosm, and as such embodies the truth of the whole universe... the importance of the Tantras, as a science of religious methodology, consists in its analysis of the body and the discovery of all tattva (i.e. Skr. तत्त्व = truth)s in the nervous system and in the plexus and thus making the body, with the whole physiological and biological process, a perfect medium (*yantra*, Skr. यन्त्र) for realising the ultimate truth.

(Shashi Bhushan Dasgupta: *An Introduction to Tantric Buddhism*, 1958)

ところで、上述の大字宙と、小宇宙である人間の肉体との合体を志向するタントラ教によると、物理的な肉体の中にも、うひひの小宇宙としての微妙細身 (subtle body, Skr. सूक्ष्म-शरीर, i.e. sūkṣma-śarīra)’ のちの前者とよびへり

副体が潜んでいるという。これはエーテル状のものによって造られた「目に見えない微細な容器」であり、「精神面で人間の肉体そのものと関連している」。

そして「この目に見えぬもう一つの肉体には、数多くのエーテル回路があって、それは運動や震動を意味するサンスクリット語の *nad* を語源とする《ナーダ》(nāḍī, i.e. Skr. नाडी = channel) と同じ知られてゐる。そのなかでも最も重要なのは……中心の微細な回路 《スミマトナー》(susumnā) (i.e. Skr. सुषुम्णा = artery or vein of the body) である。このスミマトナー回路……を通じてエネルギー 《クンダリーニー》(Kuṇḍalinī, 「軍荼利」 [i.e. Skr. कुण्डलिनी = coil]) が上昇し、人間は解脱へと導かれる」といふのである。」(Ajit Mookerjee, 1915 — : *The Tantric World*, 1980. 松長有慶訳)

このようにこの回路は人体でもっとも重要な部分である脊柱にさして、最下部から頭頂に達しており、その軸上に重要なエネルギーの中心としてこのチャクラ (cakra) (i.e. Skr. चक्र = wheel) がある。このチャクラ本 (mūlādhāra) (i.e. Skr. मूल = root, base + धार = bearing, supporting) ʼ 曼荼羅 (svādhiṣṭhāna) (i.e. Skr. स्वाधिष्ठान = one's own place) ʼ 曼珠荼 (mañjuṣā) (i.e. Skr. मणि = jewel + 珠 = filling) ʼ 無礙 (anāhata) (i.e. Skr. अनाहत = not struck) ʼ 清淨 (vīśuddha) (i.e. Skr. विशुद्ध = clean, pure) ʼ 教令 (ājñā) (i.e. Skr. आज्ञा = order) ʼ 千瓣 (śahasrāra) (i.e. Skr. सहस्रार = a kind of cavity said to be found in the top of the head and to resemble a lotus reversed) (fabled as the seat of the soul) <Skr. सहस्र = a thousand) の中心チャクラ (曼珠) である。

ちなみに原初的な宇宙エネルギーにはかならずにクンダリーニーは、上述の脊柱基底部の持根本輪の三巻を半と半とを巻いた状態の姿を眼してゐる。このサキ力 (sakti) (i.e. Skr. शक्ति = active power, female energy) を 聖氣 (prāṇāyāma) (i.e. Skr. प्राणायाम = name of the three 'breath-exercises' performed during Saṃdhya [i.e. Skr. संध्यौ = juncture of

the three divisions of the day (morning, noon, and evening); the religious acts performed by Brahmins and twice-born men at the above three divisions of the day)′ **अभ्यास** (mudrā) (i.e. Skr. **मुद्रा** = positions or interwinnings of fingers (24 in number, commonly practised in religious worship, and supposed to possess an occult meaning and magical efficacy)′ **坐法** (āsana) (i.e. Skr. **असन** = sitting in peculiar posture according to the custom of devotees, [five or . . . even eighty-four postures are enumerated]) などヨーガの行法に於て醒めさせ、**चित्त**の上部のチャクラを開発し、活性化して、ついに頭頂のチャクラに達し、大宇宙(男性)と小宇宙(女性)との合体という三昧境 (samādhi) (i.e. Skr. **समाधि** = profound or abstract meditation, intense contemplation of any particular object [so as to identify the contemplator with the object meditated upon: this is the eighth and last stage of Yoga])′ が表現する。

アジット・ムケルジーは前出書でチャクラを要約してつぎのようにいう。少し長くなるがこの項と関係があるので引用する――

チャクラとは、靈魂のエネルギーと肉体の働きが合体し、浸透しあう中心である。チャクラのなかで、宇宙と靈魂のエネルギーは、最後には溶けあい、靈魂の力に変わったりするような肉体的な性質に結晶する。目覚めたクンダリニーが上昇し、象徴的に蓮で表わされる特別のチャクラに到達したとき、この蓮は開いた花卉をもたげるのである。一方チャクラのエネルギーと他のすべての力がクンダリニーと合体する。クンダリニーが一番上のチャクラに達すると、すぐ蓮は花卉を閉じ、しておれてしまう。

このクンダリニーが昇っていったって、純粋で完全な経験のはじまりともいうべき六番目のチャクラ《アージニャー》に達す。

るまで、人間は相対的な世界から完全に解脱することがない。眉間にあるこの六番目のチャクラにおいて、人はおのれを捨て去り、二元性の種子を燃してしまふ。より高い自我は、より低い自我が変形したものから進化する。それは純粋な意識をもって生きることが可能にする超越的な「再生」といえよう。六番目の中心は七番目のサハスラーラにある千の花弁をもつ蓮の力を発動させる鍵である。

最後に、クンダリニーはその千弁のチャクラまで上昇し、*シヴァ*つまり絶対者と合一する。このようにして行者は、超越的な経験のなかでシヴァ・シャクテイとの合一を果たし、宇宙的人間となる。

* Śiva (i.e. Skr. **शिव** = the male generative force of Vedic religion. A god of reproduction, whose symbol is the Linga or Phallus, in the same manner that the Yoni was the symbol of his wife Paravati.)

ところで以上述べてきた、瞑想によるヨーガの神秘体験をもとに考えられたチャクラの位置関係を、近代医学によって裏づけようとする試みが行なわれてきた。その中心はチャクラと神経叢との対比であり、また対応である。

その一例として、Mircea Eliade (1907—) の名著 *Yoga* (1954) の説を紹介する。すなわち下から、まずムラタラ・チャクラ (持根本輪) は “is situated at the base of the spinal column, between the anal orifice and the genital organs (sacrocygeal plexus; 「薦骨尾骨神経叢」= plexus coccygens; 「尾骨神経叢」)”。スヴァーディシユターナ・チャクラ (白依処輪) は “is situated at the base of the male genital organ (sacral plexus = plexus sacralis, 「薦骨神経叢」)”。マニプーラ・チャクラ (慧珠輪) は “is situated in the lumber region at the level of the navel (epigastric [= lying upon or over the stomach] plexus = plexus coeliacus 「腹腔神経叢」 旧称 plexus solaris, 「太陽神経叢」)”。マナーンタ・チャクラ (無破輪) は “region of the heart” である “cardiac plexus = plexus cardiacus, 「心臓神経叢」” (ダスマ

ンタ)。ヴィシュッタ・チャクラ(無破輪)は“region of the throat (laryngeal and pharyngeal [喉頭部と咽頭部の] plexus at the junction of the spinal column [脊柱] and the medulla oblongata [延髄])”にある咽頭神経叢 (plexus pharyngeus) と対応する。

つぎにムケルジーからの引用にあった六番目のアージュニャー・チャクラ(教令輪)は“is situated between the eyebrows (cavernous plexus = plexus cavernosus, [海綿静脈洞神経叢])”。そして最後のサハスラーラ・チャクラ(千幅輪)については、上述のように“at the top of the head”にあることになっているが、“the *salastara* no longer belongs to the plane of the body, ... it already designates the plane of transcendence—and this explains why writers usually speak of the doctrine of the “six” *chakras*”といわれている。つまりこのチャクラは神経叢とまったく関係がないのだが、医学的には上部大脳皮質、大脳、松果体等に比定される。

以上のようなチャクラと神経叢との対応を求める試みのほかに、腺(gland)と比定するもうひとつの試みがある。それは神智学あるいは神秘思想研究者である David V. Tansley (1934—) の *Subtle Body* (1977) によれば、以下のとおりである。

すなわち、ムーラダララ・チャクラと副腎 (adrenal gland; glandula suprarenalis) / スヴァーデーシユターナ・チャクラと生殖腺 (gonad; mod. l. gonads) / マニマローラ・チャクラと膵臓 (pancreas) / アナーハタ・チャクラと胸腺 (thymus) / ヴィシュッタ・チャクラと甲状腺 (thyroid gland; glandula thyreoides) / アージュニャー・チャクラと脳下垂体 (pituitary gland; glandula pituitaria or hypophysis) / サハスラーラ・チャクラと松果体 (腺) (pineal body; corpus pineale or epiphysis cerebri) である。

さて、いよいよ本題に入る。U 本文の人体器官のうち、順序を逆にして薦骨部をまず採り上げよう。

尾骨とともに骨盤の後壁をつくる薦骨部には、先述のように神経叢があり、そこからは人体の中で最大の運動と知覚をつかせる坐骨神経 (nervi ischiadicus) が出ている。また薦骨神経叢と尾骨神経叢の一部にまたがって、陰部神経叢 (plexus pudendalis) を區別する場所がある。これらの神経叢については、以ての Lama Anagarika Govinda (1898—) の解説が参考になる——

In the Tibetan systems of meditation this Centre (ie. Svādhiṣṭhāna-Cakra) is usually not mentioned or regarded as an independent centre . . . , but is combined with the *Maḥādhara-Cakra* under the name 'sang-nā' (*gsaṅ-gnas* [i.e. Tib. ཀས་ཀྱི་གསུང་གསུང་། = secret abode, a place where secret matters are done or secret affairs are discussed; private parts of the body]), the 'Secret Place' ('secret' in the sense of 'sacral', thus corresponding to the *sacral plexus* of Western physiology). This *sacral plexus* stands for the whole realm of reproductive forces, of sexual as well as of pre-sexual nature, while these functions of the *Svādhiṣṭhāna-Cakra* which belong to the negative side of the system of nutrition (like disintegration, dissolution and separation of the elements of nutrition into substances which can be accepted and assimilated by the body, and those which cannot be assimilated and have to be rejected and eliminated) are associated with the next-higher Centre, the *plexus epigastricus* or *solar plexus*.

(*Foundations of Tibetan Mysticism*, 1960)

なお薦骨部から発する光線については、スヴァーデーシユターナ・チャクラは、Manly Palmer Hall の言葉を借りれば、

朱のまうに赤く、「福壽のまうに光つ」なる (*Man. The Grand Symbol of the Mysteries*, 1972. 大沼純武・山田耕十・吉村正和訳) そうだとして、またこのチャクラが “lotus with six vermillion petals inscribed with the letter, *b*, *bh*, *m*, *y*, *ra*, *l*” (エリアデ) で象徴されると関係があるかも知れない。

つぎの問題になるのは太陽神経叢である。太陽神経叢、つまり腹腔神経叢は、金子丑之助『日本人体解剖学』第三巻によれば——

不対性の強力な神経叢で、腹大動脈上部で腹腔動脈と上腸間膜動脈との起始部をつつみ、膀胱の後ろに位する。腹腔神経叢の構成にあずかる神経は、大・小内臓神経、右迷走神経腹腔枝（まれには左迷走神経の枝も入る）、最下胸神経節および上位腰神経の枝、胸および腹大動脈神経叢の枝などである。なお、叢内には自律神経節中最大の腹腔神経節（太陽神経節）ganglion coeliacum (ganglion solare) がみられる。

と説明されている。

またゴッヴィンダは龍田幸一——

It represents the element Fire and the forces of transformation, in the physical as well as in the psychic sense (digestion, assimilation, conversion of inorganic into organic substances as well as the transmutation of organic substances into psychic energies, etc.)

At the level of this *cakra* the world is consumed and transformed through the agency of flame generated by the upper and lower psychic energies in combination, and time is transcended; in Buddhist Tantra its colour is red and its shape an upward-pointing triangle. At this level is carried out the famous *gTum-mo* (i.e. Tib. ཀུམ་མོ། =mystic heat) ritual of Tibetan Lamaism which arouses the inner fire for all sorts of magical purposes, including warm among snows.

と書いている。

ちなみにこの神経叢は、D. H. Lawrence (1885—1930) の特異な神秘的生命哲学で有名。すなわち彼によれば、人間の知性以前の根源的な意識の生命中枢はこの神経叢にあり、また生涯を通じて人間存在の中心であるという。

さて、つぎに脳下垂体の問題であるが、これはすでに述べたように、眉間のアーージュニャー・チャクラに対応する。その位置は中脳 (mesencephalon) と終脳 (telencephalon) との間にある間脳 (diencephalon) の視床下部 (hypothalamus) の底面にあり、そこから突出した小さい卵型の器官が下垂体である。この腺は医学的には「ホルモン王国の総理大臣」(時実利彦) であるが、神智学では、サハスラーラ・チャクラに対応する松果体とともに特別に重要な器官である。例えば前出のタンズリはこういっている。

The third eye comes into manifestation as the energies of the soul, flowing through the Sahasrara or crown

chakra and pineal, interact with the energies of the personality working through the Ajna chakra and the pituitary gland. Their blended fields form the Eye of Shiva — through this eye the soul can distinguish the divine light in all forms, and by focused attention can direct energies to drive out the lower elements of earth, air, fire and water from the subtle bodies that form the personality, thus aiding in the purification of the lower self.

なまじの「第三の眼」については、前田の *Encyclopedia of the Unexplained. Magic, Occultism and Parapsychology* のいぎの説明も参照されたい——

A mysterious organ of occult vision and centre of inner illumination, one of the chakras of Hinduism and Yoga, situated in the middle of the forehead just above the point between the eyebrows; attempts have been made to connect it with the pineal gland, which in adepts is said to move forward from the mid-brain at the end of an invisible stalk, so that it can be seen on the forehead by sensitives.

これらの説明によれば、霊界との交信は魂の座である松果体と、人間の性格の座である下垂体との間にエネルギーの交流が行なわれるとき可能になり、またそのとき開かれる「第三の眼」（仏像の額の円い突起、すなわち白毫びやくごうの位置にある）によって靈視が行なわれることになる。U 本文の「頭頂と顔面から発する生命光〔4—三九参照〕」というのは、頭頂のサハスラーラ・チャクラやこの「第三の眼」と関係があるのかも知れない。

なおすでに指摘した〔4—三七参照〕ように、ディグナムの靈は死後あまり時間がたっていないために、また幽界の下層にあるわけで、それだけ交信も容易なわけである。〔訳〕

禪定 (pralaya) 普通には Skr. **प्रलय** (i.e. pralaya) = dissolution, reabsorption, destruction, annihilation; death を意味するが、それに特別な意味を付与して使われるのは、インド哲学史のなかでも主としてサーンキヤ (Skr. **सांख्य** = Sāṅkhya = numeral, relating to number; one who calculates or discriminates well, (esp.) an adherent of the Sāṅkhya doctrine, 「数論」) 学派におこつてである。

サーンキヤを体系づけたイーシュヴァラクリシュナ (Skr. **ईश्वर**, i.e. Īśvara = capable of; master + Skr. **कृष्ण**, i.e. kṛṣṇa = black) (自在黒) のサーンキヤ = カリーカー (Skr. **सांख्य-कारिका**, i.e. Sāṅkhya-kārikā = concise statement in verse of [esp. philos. and gramm.] doctrines, 「数論偈」) によれば、この宇宙の中心の中心の本性 (根本原質) とも訳す) **प्रकृति** (i.e. Skr. **प्रकृति** = [in the Sāṅkhya phil.] the original producer of [or rather passive power of creating] the material world [consisting of 3 constituent essences or Guṇa (i.e. Skr. **गुण**)] から生成展開したもので、一定の時期には再びもとの本性に還るのである。この生成と還滅は無限の反復に於て行われる。さらにこの本性の他に多数の知者 **पुरुष** (i.e. Skr. **पुरुष** = [in Sāṅkhya] the Spirit as passive and a spectator of the Prakṛiti or creative force) が独立に存在してゐる (金倉田照『インド哲学史』)。つまりプラクリティは物質的な原理であり、プルシャは精神的な原理であつて、この両者によつて世界は成り立っているのである。

ではなぜ問題のプララヤのような現象が起るかとしようと、それはつぎのように説明をわけている。高名な Surendranath Dasgupta (1885—1952) の大著 *A History of Indian Philosophy* から引用する——

... the prakṛti or the sum-total of the guṇas is so connected with puruṣas, and there is such an inherent teleology or blind purpose in the lifeless prakṛti, that all its evolution and transformations take place for the sake of the diverse puruṣas... A return of this manifold world into the quiescent state (*pralaya*) of prakṛti takes place when the karmas of all puruṣas collectively require that there should be such a temporary cessation of all experience. At such a moment the guṇa compounds are gradually broken, and there is a backward movement (*pratisaṅgāna*, i.e. Skr. **प्रतिपङ्क**) till everything is reduced to the guṇas in their elementary disintegrated state when their mutual opposition brings about their equilibrium... The state of pralaya thus is not a suspension of the teleology or purpose of the guṇas, or an absolute break of the course of guṇa evolution; for the state of pralaya, since it has been generated to fulfill the demands of the accumulated karmas of puruṣas, and since there is still the activity of the guṇas in keeping themselves in a state of suspended production, is also a stage of the saṃsāra (i.e. Skr. **संसार** =transmigration, metempsychosis) cycle... Thus when the karmas of the puruṣas had demanded that there should be a suspension of all experience, for a period there was a pralaya. At the end of it, it is the same inherent purpose of the prakṛti that wakes it up for the formation of a suitable world for the experiences of the puruṣas by which its quiescent state is disturbed. This is but another way of looking at the inherent teleology of the prakṛti, which demands that a state of pralaya should cease and a state of world-framing activity should begin. Since there is a purpose in the guṇas which brought them to a state of equilibrium, the state of equilibrium also presuppose that it also may be broken up again when the purpose so demands. Thus the inherent purpose of the prakṛti brought about the state of pralaya and then broke it up for

the creative work again, and it is this natural change in the prakriti that may be regarded from another point of view as the transcendental influence of the puruṣas.

このようにサンスクリットの本来の意味、およびとくにサーンキヤ学派の用語としては、ブララヤは物質的世界(人間もそれを構成する「要素」)の崩壊と終滅を意味するとともに、大著『サーンキヤ哲学』の著者である鹿兒島経済大学の中村了昭教授の御教示によると――

ブララヤの原意について。プラは前綴語で「前方へ、に向かって」。ラヤは動詞 $\sqrt{\text{ra}}$ (音譯 ie と同根) (○消滅する、解体する、○かくれる ○横たわる、休息する等) から導かれ、◇消滅、分解、休息、休止等の意味。両者の複合語として、ブララヤはそのような意味をすべて持っています。本来「滅し行くこと」を意味する語ですが、実際に思想書に使用されている例をみますと、「そのものを生じた根源に向って没すること」をさします。そしてその本体が空無になるのではなく、もとの状態に「かくれること」になり、その結果からみると「休息している状態」になります。言外にすべて包括しています。「但し「休止すること」をあらわす専門用語に hivṛti (i.e. Skr. $\sqrt{\text{vṛ}}$) があります。このように、ブララヤを広義に解すると、その原義にある休止状態もさし得るわけで、ダスクプタが最初 a return of this manifold world into the quiescent state (pralaya) 「静止状態への還帰」としながら、後には a return into をとってしまっているのは、そのような考えからと思います。

とあり、また「ブララヤに関する幾つかの具体例」として「神話的宇宙観」を採り上げ――

宇宙年代の朝が来ると、梵天が眠から醒めて活動を始める。まず大存在を創造する。「大存在」から根本原質が生ずる。根本原質から……生ずる。宇宙年代の夜が来ると、……は根本原質に還没する。根本原質は「大存在」に還没する。梵天は大存在を摂受して、眠につく。(反復)

と述べられているところを踏まえて、このブララヤに対する Helena Petrovna Blavatsky (1831—91) の理解度および解釈を勘案すると、さほどサーンキヤ学派、ひいてはインド哲学一般に関する素養があったとは思われない彼女のブララヤの以下に引用する知識は、あるいは前出の神話的宇宙観に由来するのかも知れない。彼女はいう——

Dissolution, the opposite of Manvantara, one being the period of rest and the other of full activity (death and life) of a planet, or of the whole universe.

(*The Key to Theosophy*, 1889)

だが、(1) **मन्वन्तर** は **मन्व** として、神智学の manvantara はサンスクリットの本来の意味とは関係なく、勝手に新しい意味が付与されている。なぜなら、サンスクリットの本来の意味では、manvantara (i.e. Skr. **मन्वन्तर**) = the period or age of a Manu, i.e. Skr. **मन्व** = this name belongs to fourteen mythological progenitors of mankind and rulers of the earth, each of which hold sway for the period called a Manvantara [*manu-antara*], the age of a Manu, i.e., a period of not less than 4,320,000 years [it comprises about 71 mahā-yugas, which are held equal to 12,000 years of the gods or 4,320,000 human years or $\frac{1}{14}$ th of a day of Brahmā; each of these periods is presided over by its own special

Manu; six such Manv-antarās have already elapsed, and the 7th, presided over by Manu Vaivasvata, is now going on; 7 more are to come, making 14 manv-antarās, which together make up one day of Brahmā) であるからである。ちなみにプラヴァツキ女史の前出書のマンヴァンタラの定義をみると——

A period of manifestation, as opposed to Pralaya (dissolution or rest); the term is applied to various cycles, especially to a Day of Brahmā—4, 320, 000, 000 Solar years—and to the reign of one Manu—308, 448, 000. Lit., Manvantra—“between Manus.”

とあり、この解説がいかにも恣意的なおおわかりいただけたことと思う。また“antra”に關しても、betweenのサンスクリットは अन्तर (i.e. antar) であつて、しかもそれが作る複合語にいついつ“Antar is sometimes compounded with a following word like an adjective, meaning interior, internal, intermediate.”と説明されている。もつて女史のサンスクリット、ひいてはインド哲学の理解の程度を知るべきである。

それはともかく、ここでは人間個人の生死つまり輪廻による再生が問題である。もっとも、神智学では再生に關しても一定の考えがあるので、それを以下に紹介する。ディグナムの靈が進化するために、これから行なわなければならない業(Karma)が規定され、死んで間もないディグナムの靈が降靈されて現世と交信することが、神智学の立場からするならば、けつして無駄にはならないからである——

Reincarnation is an extremely important part of Theosophical theory, and, while it is commonly regarded as a

succession of lives, the proper aspect in which to regard it is as one single, indivisible life, the various manifestations in the flesh being merely small portions of the whole. The Monad, the Divine Spark, the Ego... is truly a denizen of the three higher worlds, the spiritual, the intuitional and the higher mental, but in order to further its growth and the widening of its experience and knowledge, it is necessary that it should descend into the worlds of denser matter, the lower mental, the actual and the physical, and take back with it to the higher worlds what it has learned in these. Since it is impossible to progress far during one manifestation, it must return again and again to the lower worlds.... Every individual will eventually attain perfection.... The laws of his progress, the laws which govern *reincarnation*, are those of evolution and of karma. Evolution decrees that all shall attain perfection and that by developing to the utmost their latent powers and qualities, and each manifestation in the lower worlds is but one short journey nearer the goal.... Karma decrees that effects good or bad, follow him who was their cause. Hence, what a man has done in one manifestation, he must be benefited by or suffer for in another.... After physical death, man passes first to the astral world, then to the heaven portion of the mental world, and in this latter world most of his time is spent except when he descends into the denser worlds to garner fresh experience and knowledge for his further development in preparation for passage into the still higher sphere. In the heaven world these experiences and this knowledge are woven together into the texture of his nature. In those who have not progressed far on the journey of evolution, the manifestations in the lower worlds are comparatively frequent, but with passage of time and development, these manifestations become rarer and more time is spent in the heaven world, till, at last, the

great process of *reincarnation* draws to an end, and the pilgrims enter the Path which leads to perfection.

(An *Encyclopaedia of Occultism*)

最後にブララヤの訳語「還没」について一言する。

普通仏教では「没」を漢音「ボツ」でも呉音「モチ」でもなく、慣用音「モツ」によって読み「ゲンモツ」という。例えば中村元『仏教語大辞典』でも、「還没(げんもつ)」と読ませている。しかしこの辞書で使われている意味は *antarhita* (ie. Skr. *अन्तरहित* = concealed; hidden from (with abl. [case])); 消滅せる。漢訳隠没、隠没、還帰、還没、漢訳对照 梵和大辞典)であって、ブララヤ(帰滅。根源のうちに消え失せること『仏教語大辞典』。帰滅、本多恵『サーンキヤ哲学研究』)とは異なっている。

では、なぜ一般的なブララヤの訳語「帰滅」を採らないで、あえて別の「還没」を使ったかという点、字と音への好みから、山口恵照『サーンキヤ哲学序説—サーンキヤへみちびくもの—』の用例「劫滅—還没 (*pratisarga* [ie. Skr. *प्रतिसर्ग*] = secondary or continued creation out of primitive matter, dissolution, destruction; (宇宙の破壊に次ぐ)再創造『梵和大辞典』, *pralaya*)にしたがったからである。

ちなみにブラクリティに還る、すなわち、ふたたび現象界として再成するという意味での対意語は *प्रवृत्ति* (ie. *pravṛtti*=moving on,「転現」)、『あまのこは *परिणाम* (ie. *pariṇāma*=change, transformation into (instr. [case])), development, evolution,「転変」)で、とくに前者がよく用いられる。

それはとにかく、ジヨイスの用例を見ると“on the path of *pralaya* or return”とあり、この用法はブララヤの本来の意味からすると明らかに誤用であるが、要するにこの段は隆靈術に対するパロディであることを考えると、仏教的な読み

邊没は避けて、あえて邊没としよう読みを採用した次第である。【訳】

靈界 (the spirit) いま問題にしてなければならぬのは、本文の既述の「靈界に進む進化 (atmic development)」の “atmic” の “spirit” の關係である。

神靈界と人間の精神・物質界の區別は、最高の世界から最下の現象界まで七層に分けられる。ちなむさく知の中心である。

① adi (i.e. Skr. आदि = beginning; Theos. the First, the primeval plane or divine world ② anupadaka (?)) plane or monadic (<<Theos. monad = “Divine Spark”, a part of the Logos, the Divine Fire) world ③ atmic (<<Skr. आत्मन्, i.e. ātman = the soul, principle of life and sensation; Theos. the Universal Spirit, the divine Monad... the Supreme Soul), movanic (?), or nirvanic (<<Skr. निर्वाण, i.e. nirvāṇa = [with Buddhists and Jains] absolute extinction or annihilation of individual existence or of all desires and passions; perfect calm or repose or happiness, highest bliss or beatitude; Theos. the state of absolute existence and absolute consciousness, into which the Ego of a man who has reached the highest degree of perfection and holiness during life goes, after the body dies, and occasionally, as in the case of Gautama Buddha and others, during life.) plane or spiritual world ④ buddhic (<<Skr. ब्रह्म, i.e. buddha = [with Buddhists] a fully enlightened man who has achieved perfect knowledge of the truth and thereby is liberated from all existence and before his own attainment of Nirvāṇa reveals the method of obtaining it) plane or intuitional world ⑤ manas (i.e. Skr. मनस् = mind [in its widest sense as applied to all the mental powers], intellect, intelligence, understanding, perception, sense, conscience, will) plane or mental world ⑥ astral plane or emotional world ⑦ physical plane or material world

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

精神世界に於て、その最高の世界に於ては、人として経験し得る目的は、神智學の進歩に在りて、その終着に在りて、monad “that the divine evolutionary purposes may be carried out, its ray is borne downwards through the various spheres of matter when the outpouring of the third life wave takes place. It first passes into the Spiritual Sphere by clothing itself with an atom of spiritual matter and thus manifests itself in an atomic body, as a spirit possessing three aspects (i.e. Will, Wisdom and Activity). When it passes into the next sphere, the Intuitional, it leaves its aspect of Will behind and in the Intuitional Sphere, appears in an Intuitional body as a spirit possessing the aspects of Wisdom and Activity.... From the higher mental sphere the *Monad* descends to the lower mental sphere and appears in a mental body as possessing mind, then betakes itself to the astral sphere and appears in the astral body as possessing emotions, and finally to the physical sphere and appears in a physical body as possessing vitality. These three lower bodies, the mental, the astral, and the physical, constitute the human personality which dies at death and is renewed when the *Monad*, in fulfilment of the process of reincarnation, again manifests itself in these bodies.

〔訳〕

但羅法那……波吒虞羅薩都 (tatātānā... vātālāsāt) 列拳とされる近代的な屋内設備は、英語「ちなみに、ヒンディー語はサンスクリットとおなじデーヴァナーガリー文字を用い、例えばエレベーターは उत्थापक (uttāpaka) を神智學で尊重されるサンスクリット (ヒンディー語) 風に発音したもので、もちろんそのような傾向を皮肉っている。また霊界の住居に以上のような近代設備があるというのも、神智學的思考に対するパロディである。

この問題の設備は、順じ、tatātānā=telephone, ālavātār=elevator, hātākālā=hot and cold (running water),

wātakāśāt = watercloset のことである。なお、これらの単語の長母音の記号は、ヒンディー語の場合、母音を呑み込むのでその発音が不明瞭になる、それをはっきり発音させるために、ローマナイズした形の名詞にはかならずつける。これは前出の *pralaya* [4—四八参照] についても同様。

これらの設備の訳語として用いた漢字は、みな真言陀羅尼で普通に使われている音訳用のもの。「呪語多含。此間無物以擬之。若欲翻之於義不盡。又失其勢用。如此間禁呪之法。要須依呪語法而誦之。則有神驗」。(呪の語は多含なり。此の間には物として以て之に擬すべきなし。若し之を翻せんと欲せば義に於て盡くさず。又其の勢用を失はん。此の間の禁呪の法は如し、要らず須く呪語の法に依つて之を誦すれば、則ち神驗あり) (『法華義疏』十二 大正蔵三四・六二九・下) といわれているように、陀羅尼の場合も古来梵音そのままを尊重し、それに神力があると考えていたわけで、神智学と一脈通じるところがあからずある。〔訳〕

मय (Māyā) Sk. मयि, i.e. māyā = (in phil.) illusion (identified in Sāṃkhya with Prakṛiti... and in that system, as well as in the Vedānta, [i.e. Sk. वेदान्त = text forming the conclusion or the essence of the Veda, i.e. an Upanishad and the theologico-philosophical doctrine based thereon], regarded as the source of the visible universe) 又 Heinrich Zimmer (1890—1943) の *Philosophies of India* (1951) (編集者 Joseph Campbell (1904—) が同書に付けた脚注) によれば、

Māyā, from the root *mā*, “to measure, to form, to build,” denotes, in the first place, the power of a god or demon to produce illusory effects, to change form, and to appear under deceiving masks. Derived from this is the meaning, “magic,” the production of an illusion by supernatural means... Māyā in the Vedāntic philosophy

is, specifically, “the illusion superimposed upon reality as an effect of ignorance” . . . Śaṅkara (ie. Skr. **शाङ्कर**) describes the entire visible cosmos as *māyā*, an illusion superimposed upon true being by man’s deceitful senses and unilluminated mind . . .

ちなみにマヤーに関する神智学、つまりブラヴァツキ女史の知識は、ちちおう及第——

Illusion ; the cosmic power which renders phenomenal existence and the perceptions thereof possible. In Hindu philosophy that alone which is changeless and eternal is called *reality* ; all that which is subject to change through decay and differentiation, and which has, therefore, a beginning and an end, is regarded as **MAYA**—illusion.

(*The Key to Theosophy*)

【註】

神龕中廻 (**devanic circles**) devanic < Skr. **देव**, i.e. deva = a deity, god . . . (pl. the gods as the heavenly or shining ones or a partic. class of deities, often reckoned as 33, either 11 for each of the 3 worlds.)

ひちじゅうさんじゅうの神龕中の神龕中廻——

A god, a “resplendent” Deity, *Deva-Deus*, from the root *div* (i.e. Skr. **दिव**), “to shine.” A Deva is a celestial being—whether good, bad or indifferent—which inhabits “the three worlds,” or the *three planes* above us. There are 33 groups or millions of them.

animal, f. z66s [i.e. {w6c}] living." Ed. C. T. Onions: *The Oxford Dictionary of English Etymology* と呼ばれ、
宮 (sign) とごう一二個の長方形の区画によって仕切られる。そしてその一二宮はそれぞれが対応する黄道帯域内の星座名
(ほとんどが動物の名) にもとづいて名付けられている。

すなわち、太陽が三月二一日の春分の日を起点として、東の地平線上の一点から北に運行する順序に、牡羊座 (Ram) に
ちなんで白羊宮 (Aries) 、ひぎに牡牛座 (Bull) にちなんで金牛宮 (Taurus) 、双子座 (Twins) にちなんで双子宮 (Gemini) 、
蟹座 (Crab) にちなんで巨蟹宮 (Cancer) 、獅子座 (Lion) にちなんで獅子宮 (Leo) 、乙女座 (Virgin) にちなんで処女
宮 (Virgo) 、天秤座 (Scales) にちなんで天秤宮 (Libra) 、蝎座 (Scorpion) にちなんで天蝎宮 (Scorpio) 、射手座 (Archer)
にちなんで人馬宮 (Sagittarius) 、山羊座 (Goat) にちなんで磨羯宮 (Capricorn) 、水瓶座 (Water-carrier) にちなんで宝
瓶宮 (Aquarius) 、そして最後に魚座 (Fishes) にちなんで双鱼宮 (Pisces) がくる。

ところで地球は地球上の特定地点の地平線によって二分され、眼に見える部分と眼に見えない部分とにわけられる。つぎ
にそれぞれの半球を子午線 (meridian) にそって縦に二分すると、全体で四つの部分にわけられることになる。この四つの
部分をさらに「南北の基本方位基点を通る大きな円周によって三等分」(Paul Couderc: *Astronomie*, 1951. 有田忠雄・菅
原孝雄訳) すると、合計一二の等しい三日月形の球面が得られる。これらの球面がすなわち家 (house, f. maison) と呼ば
れるものであるが、その番号は日周運動とは逆に東の地平線から南へ、I から VI までの家が眼に見えない夜の部分に、また
VII から XII までが眼に見える昼の部分にあることになる。

この家の体系は占星術にとってはとくに重要なものである。Warren Kenton (1933—) はごう——

This gave not only a more accurate picture of the positions of the sun, moon and planets at the place and

hour under consideration, but a precise time plot of the zodiac itself as it rotated through a twenty-four-hour cycle. The scheme became a standard grid, every chart adopting the idea that, while all the celestial bodies varied in position, this set of divisions was constant for any given point on earth.... each of the twelve sectors or 'houses' had a particular effect on the signs and celestial bodies posited in it at a given moment.... Further examination revealed that the characteristics of the twelve houses corresponded to those of the zodiac signs, but that they were arranged in reverse order....

This system was called that of the mundane houses because each house appertained directly to worldly matters, there being a distinction between the moving zodiac, which defined the psyche, and the fixed grid of the houses, which governed the manifestations of the psyche in the world.... Each house was given an area of worldly domain. Thus, the first (Aries) was concerned with appearances; it is the threshold of the day....

(*Astrology. The Celestial Mirror*, 1974)

なお、「黄道十二宮の帯は各家と斜めに交叉する。各家を限定している円周は黄道を一二の点で切るが、それを初端(英語では cusps)と名づける。初端と初端の間に含まれる黄道の弧は、すべてが等しい長さをしているわけではない、黄道が球面月形を端から端までそれぞれ異なった距離で斜めに裁ち切るからである。」

したがって、「家が始まる部分の初端を家の初端と呼ぶ。(家が終る部分の初端は次の家の初端である。)東の第一の家の初端は上昇点 [i.e. ascends, E. ascendant] と呼ばれ、黄道の地平に昇る点である。この上昇点を含む宮自体も同じように上昇宮と呼ばれる。(これに相対する西の点が下降点 [i.e. occidens, E. occident] ——つまり地平に沈む点である。)

上昇宮はホロスコープではとりわけ重要な意味を帯びる。Xの家の初端（つまり上の子午線を通過する黄道の点）は天の中央（MC *medium caelum*）と呼ばれ、それに相對する下の子午線上の初端が天の底（FC [i.e. finale caelum]）と呼ばれる。これら四つの初端Asc「上昇点」、Occ「下降点」、MC、FCがホロスコープの四つの角と名づけられ、占星術において大きな力をふるうのである。」（ポール・クデール）

U本文の“the eastern angle (= a name given to the four astrological houses), at the cardinal points of the compass)”と云うのは、いままさに言及された東の第一の家の初端、つまり上昇点のことである。

ところで、天動説にもとづく占星術においては、惑星としては、原則として幸運をもたらす太陽(Sun)、木星(Jupiter)、金星(Venus)と、不運をもたらす月(Moon)、水星(Mercury)、火星(Mars)、それに土星(Saturn)の七天体が挙げられる。そして「一二個の家は、それぞれ同一番号の宮およびその宮の支配者たる惑星と連繫して」おり、中でも、「ホロスコープの角と言われるI、IV、VII、Xの家が一番主要な家で、きわめて幸運とされる（とりわけIとXの家が）。」（同上）

また上昇宮は占星術的な、天体についての判断をくだす上でとくに重要な要素で、「その宮の支配惑星（ホロスコープでは支配惑星がいずれかの宮と家に場を占めるのであるが）の位置が特定の人間の性格について完全な情報を与える。上昇点に位置する惑星が特別の力（幸運の威力を強めるにしろ、不吉な威力を發揮するにしろ）を獲得することになるからである。」（同上）

さて、問題の火星が支配する宮はなにかというと、ひとつは問題の白羊宮であり、もうひとつは天蝸宮である（前者においては能動的、後者においては受動的という違いがある）。したがって「火星（エネルギーと攻撃性と野心の象徴）は、自己と調和する白羊宮ないし天蝸宮にある場合、そのもてる力を最大限に發揮する。加えて、*その意味と対応する宮が上昇点にあれば、火星は運命の星ということになる。」（同上）

* 「ひとつの天体が占める宮および家は、その天体自身の意味に著しい修正を施す。つまり、どの惑星も自らと調和する宮ないし角にある場合には、その意味が強まり、逆に不調和の宮や対立した意味をもつ家にある場合には、その惑星の影響力が弱まるのである。」を参照のこと。

以上よりすると、Uのディグナムの死後の運勢は強運にめぐまれ、火星を運命の星として、白羊宮内の上昇点より第一日を踏み出したわけである。

ただ問題は、あらゆる意味でもっとも重要な「東角方」で火星と木星が「災いをもたらそうとしている」ということである。先述のように、木星は原則としては好運の星であるが、悪いことに火星とは敵対関係(ケントンによれば、“Jupiter, the complementary planet to Mars, acts as the expansive counterpart to Mars contraction”にあり、しかも火星と木星の両者が白羊宮に、じきり合 (conjunction, “sometimes good, sometimes evil” [Emile Grilhot de Givry: *A Pictorial Anthology of Witchcraft, Magic & Alchemy*, 1931]) の関係にあるわけだ、とうぜん何らかの災いが生ぜずにはおかない。

なお、国立科学博物館理化学研究所天文係の返事によれば――

一九〇四年の天文暦が当方にはございませんで略算致しましたところ、六月十六日ころ火星はおうし座にあり「合」(この場合は占星術ではなく、天文学上の用語。すなわち惑星が地球から見て太陽と同じ方向にあること。)をすぎたばかりの状態で、太陽の向う側にありほとんど見えません。また木星はうお座の東端あたりにありまして明方東南の空に見えていたはずであります。

とある。

ということはジョイスの関心は、一九〇四年六月一日ごろの天文学上の火星と木星の位置にはなく、もっぱら占星術にあり、しかもそのパロディを目的としてこの個所が書かれている確証になる。〔訳〕

四一頁 愛蘭土の大地 (*Banba*) (i.e. *Ir. Danba or Danba*)。ジェフリ・キーティングの『愛蘭土史』〔一—五三の注解参照〕によれば、バンバ(あるいはバンヴァ)はIr古来の国名であって、それはトゥハ・デ・ダナン族〔同上〕の女王の名に由来する。

ちなみに父王 *Cearmno* (i.e. *Cearmad*) の三人の息子のひとり、*Eacúir Mac Cunn* (i.e. *Fathúr Mac Cuill*) 王の后が問題のバンバである。ほかの兄弟は、ひとり *Ceathúr Mac Sreine* (i.e. *Ceathúr Mac Greine*) 王と、その后は *Eire* (i.e. *Eire*) でおなじくIrの古名〔一—五九の注解参照〕でもある。またもうひとりの王 *Ceathúr Mac Céor* (i.e. *Teathúr Mac Cécht*) の后 *Fóola* (i.e. *Fódha*) もおなじくIrの古名。

では、なぜこの三人の神話上の女王、つまり女神の名が国名になったかという、先述の三人の兄弟王はIrを三等分して統治したのではなく、各人が一年交替で王位につき、その間はIrその王の後の名で呼ばれたからだと説明されている——

Saé ré mbliaróam oo bíoró rom

An rúise as na flactaib,

Éine fóola ir Danba

Ctuáir ban na laoc láncaíma.

(Every year by turns

The chiefs held the kingdom ;

Fire, Podla, and Banbha,

The three wives of the very strong warriors.)

また Lebor Sabáia Ehem (i.e. *The Book of the Taking of Ireland*) or Leabán Sabáia (i.e. *The Book of Invasions*) (12c.) にも紹介されているもうひとつの説によると、ノアの洪水以前に、最初に Ir を発見し占領した女王の名がバンバで、それゆえにそれはまた Ir の国名でもあるという。彼女はトゥン・デ・ダナン族侵入以前の先住の異教の女神であるというのだ。

また大著 *The Masks of God*. 4 vols. (1958—68) の著者で、アメリカ人の神話学者ジョウジフ・キャメル〔4—五七参照〕は、ハンバの語源を banba (= a young pig; a pig in general [poet.]) に求め、古代ギリシアの神話や祭祀にしばしば豚の姿で現われる大地と豊穡の女神 Δημήτηρ (i.e. Demeter) や、その娘で冥界の王 'Aidy (i.e. Hades) の后であり、穀物の種の女神でもある Περσεφόνη (i.e. Persephone) と類似したケルト文化以前の女神だと考へる。豚が死者崇拜と関係があるところから、ハンバも冥界と関係の深い女神だといふのである。〔訳〕

ウエイリヤン (Little Willy) この項については、イギリス児童文学の権威 Iona & Peter Opie (1919—82) 夫妻の名著 *The Love and Language of Schoolchildren* (1959) からの引用を参照のこと——

When children are about ten years old they enter a period in which the outward material facts about death seem extraordinarily funny. They ask each other: 'You going to be burnt or buried?' They have catch phrases:

'It's not the cough that carries you off, it's the coffin they carry you off in.' They have mock laments:

Poor old Peggy's dead,

Little Willie's dead,

She died last night in bed.

Jam him in the coffin,

We put her in a coffin

For you don't get the chance

And she fell right through the bottom,

Of a funeral ofen (=often).

Poor old Peggy's dead.

〔訳〕

四三頁 ジョウ・キャン、トウキ・スミス、H・ラムボールド (Joe Gan, Toad Smith, H. Rumbold) 一九一八年四月、当時ス
イスのチュールリッヒに住んでいたジョイスは、当地在住のアメリカ人のパトロン Edith Rockefeller McCormack (1872—
1932) から助成金を得たのを機に、いろいろな思惑から、俳優の Claud Sykes (1883—1964) と組んで English Players
という劇団を組織した。そして最初の演目^{本題}に決った Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde (1854—1900) の *The Importance*
of Being Earnest (prod. 1895) の主役 Algernon Moncrieff を演ずるのにふさわしい人物として、イギリス領事館の若い
館員 Henry Carr がスカウトされた。

この劇のチュールリッヒでの公演は成功裡に終った。そしてその二日後に、ジョイスが領事館におもむき残りのチケット八
枚分の金額を要求すると、カーは三枚分しか支払わず、かえって衣裳代を要求してきた(このとき同席していたのがスミス
とキャンというふたりの館員)。実は素人俳優であるカーとの間には、当初から無報酬で働き、交通費として若干の金子が

支給されるという契約があったのだ。

そこでジョイスが直ちにその要求を拒否すると、カッとなったカーは無謀にも領事館員としてあるまじき誹謗をあえてして、口をきわめて罵った。このように彼がジョイスにからんできた心の奥底には、一般に支配者イギリスの戦争の帰趨に無関心であったIr人のひとりとして、日頃のジョイスの言動が半ば叛逆罪に値するとの領事館の判断があったためだといわれている。

ジョイスは持前の気性から直ちに総領事 Andrew Percy Bennett (1886—1943) に抗議の手紙を送り、色よい返事が得られないと見るや、ベルン在住のイギリス大使 Sir Horace George Montague Rumbold (1869—1941) に、ついでパウンドン〔1—九九の注解参照〕を通じてイギリス外務省に抗議した。

それとともにカーに対してチケット五枚分の未払い金と、名誉毀損の訴訟を起した。その結果は、前者はジョイス側の勝訴、後者は敗訴であった。それというのも後者に関しては、予想したように、証人として申請した総領事は外交官としての特権を行使して出頭せず、またスマイスとギャンは法廷に出頭はしたが偽証を行ったのが原因であった。

ジョイスはこれに対する報復として、Uにランポウルドを死刑執行人、スマイスとギャンをその処刑者、カーを第一五挿話の酔っぱらいの兵卒、ベネットをその上官の曹長として登場させている。なお、スマイスの個人名トウドは、ジョイスがずんぐりむっくりの彼につけた綽名「蟾蜍」ひまがえるに由来する。〔訳〕

その一 正誤表

頁	行	誤	正
二八	一八	オウコヌル	オコンヌル
三四	一〇	誓約に忠実な	誓約に縛られた
三七	一一	国会議員連中の、まあ、	国会議員連中。それに、
	一〇	テレンス・オウライアン	テレンス・オウライアン
	一一	レダ	リーダー
	一八	ブルンズウィック	ブラウンシュヴァイク
三九	一五	連中ときたらけさ奴を*	連中ときたらけさ奴を*
四〇	一〇	神界	靈界
	一四	火星と……東方舎で	火星と……東方角で*

その二 正誤表

頁	行	誤	正
一〇	六	「ガージェイ・マクドウェル……」	「ガージェイ・マクダウェル……」
一一	八	この俺さまなら	この俺さまが
一八	五	スラタリ師〔架空の人物?〕	スラタリ師〔D聖救世主教会のJ〕 〔D・D・スラタリ師?〕

その三 正誤表

頁	行	誤	正
四	一四	〔三三〕	〔三〕
八	一一	〔D市南岸……ストーリー トにある歌〕	〔D市南岸……ストーリー トにあった歌〕
一四	三三	〔参照 三一四一〕	〔参照 三一二二〕
一四	三三	〔三三〕	〔三〕
一五	四四	〔参照 三一三八〕	〔参照 三一八〕
九	九	〔参照 三一四二〕	〔参照 三一二二〕
一七	一一	者なんか	奴郎なんか
一七	一一	〔参照 三一四五〕	〔参照 三一二五〕
一八	一五	〔四六〕	〔一六〕
一八	一五	〔参照 三一四六〕	〔参照 三一六〕
一九	二	〔参照 三一四五〕	〔参照 三一二五〕
一九	二	今かいまかと期待して	今かいまかとお産を期待して
一〇	一〇	〔三四〕	〔一四〕
一三	一三	飲み代 <small>しち</small> を支払うということ	飲み代 <small>しち</small> を支払うこと
		〔三四〕	〔一四〕

一六	二〇	二二	二三	二四	二八	二七	二五	二九	三〇	一八	一四	九	三	一三	一八	八	七	二	二	〇	八	四	三	一	一四	二	二	
ハンガリー……ヴィラークだなんて！	〔三四〕 ³	〔悪からの浄化……聖ベネディクトゥス③〕 ³	〔五〇……〕 ³	さまざまな奇蹟	〔三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³	〔参照 三四六〕 ³
何がハンガリー……ヴィラークだ！	〔三四〕 ³	〔悪からの浄化……聖ベネディクトゥス③〕 ³	〔一〇……〕 ³	さまざまな奇蹟	〔参照 三四六〕 ³																							